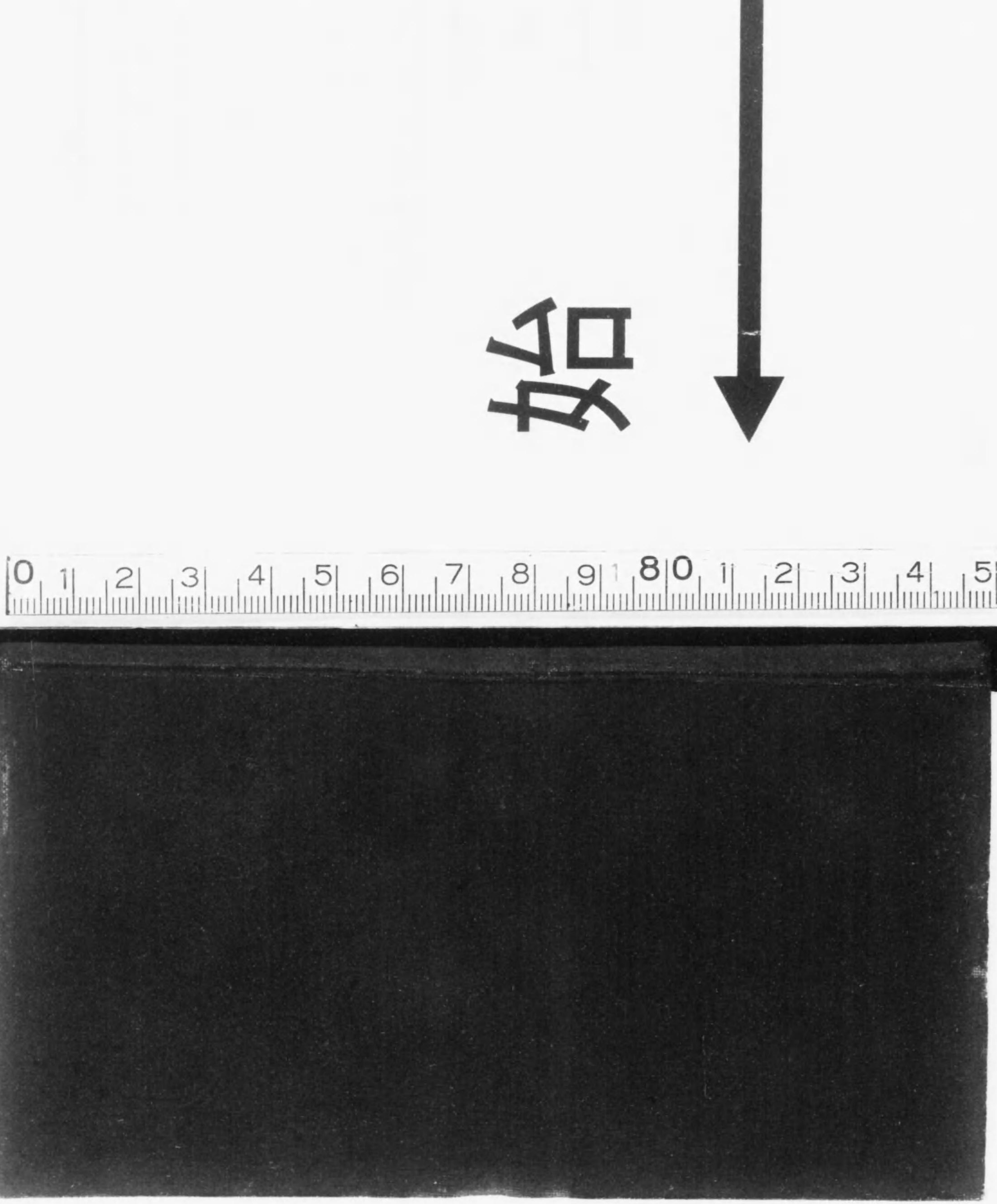
袋

108

特264
359

島田俊雄譯評

譯註十八史略 全

昭和六年
東京帝國大學

緒言

昭和十一年二月二十六日に突發した大事件――所謂二・二六事件に依りて、岡田内閣は引退し、色々の紆餘曲折を經て、三月九日廣田内閣が成立した。僕は所屬政黨たる立憲政友會總裁鈴木博士の推薦によりて、此内閣の閣僚となり、農林大臣に就任した。廣田内閣は庶政一新を標榜して、可なり多くの仕事を爲し、又色々の仕事を計劃したが、本年の一月二十一日第七十議會會議再開劈頭の施政方針演說の直後、對議會策に關する閣内意見の不一

致から突如として總辭職を決行する事となつた、其時僕は此一年弱の在官時代の思ひ出の種として豫て政黨政治家の讀物の隨一―寧ろ教典と考へて居る十八史略の刊行を思ひ付いた。

僕が十八史略を初めて讀んだのは、數へ年で八ツか九ツの時であつたろう。ソレが其頃の小學校の教科書であつたかドウか、ソレは今記憶にないが、美濃紙判のカヘリの付いた原文であつた。無論ソレは唯だ素讀する丈けの事で、文章の意味などの解ろう筈はない。ソレから其時ソノ本は五册か七册かであつたが、ソレを仕舞ひまで讀んだかドウか、ソレも今では全然記憶して居ない。

ソノ頃、僕の家は、非常に貧乏で、當時八十歳位イの高齡の祖母と僕と二人キリの暮して、一ト月か二タ月置きに、九州の方へ出稼ぎに行つて居る叔父さんから、僅かづつの送金があるのと、年寄りではあるが、非常に元氣な祖母が木綿の手機を織つて少し位イ收入を得て居たらしい、ソノ收入とで、ドウやらコウやら平和に生活を立てゝ居た樣な有樣で、仲々上の學校へ這入れる事情ではなかつたのであつたが、一旦實家へ歸つて更に再緣をして居た母の心配で、山口縣で代言人をして居た母方の叔父――母の弟から學資が出る事になり、ソノ關係から十歳であつたか十一歳で

あつたかに山口縣の萩の叔父の家へ行く事になり、ソコデ萩學校といふ中學程度の學校へ入學する樣になつた。ソノ萩學校の入學試驗の準備の爲めに、堀内といふて士族屋敷のある街の益田といふ老人の漢學先生の私塾へ暫く通ふて居たが、ソノ時教はつた漢文の本の一ツが矢張り十八史略であつた。ソレが僕が十八史略を讀んだといふか、讀まされたといふか、兎に角十八史略を讀んだ第二回目である。固より其時も素讀である。少しは講義も聞いたかも知れぬが、勿論意味などを味ふ力などのある筈はない。天皇氏がドウの、地皇氏がドウの、兄弟何人各一萬八千歳など――所

謂荒唐無稽な夢の樣な文章や文字を、唯だ文章として文字として、御經を讀む樣に棒讀みにした以外の何ものでもなかつた。或はソノ時には何か意味も少しは解つた積りで讀んで居たかも知れぬが、ソレは唯だソレキリの事で、今に於てソノ時にソレをドウ云ふ具合に解釋して居たかの記憶などは全然ないのが眞實であつて、若し强いて記憶を喚起していふならば、益田の老先生から、一尺も有る樣な大きな箸の樣な煤竹で拵らへた竹の棒で一字一字指し示しながら、昨日教はつた所を讀まされて、二字も三字も忘れて居て、柔和な優しい眼ではあつたが、ソレも忘れたかといつて叱

られるのの苦しかつたといふ事位イである。今アノ先生の顔はドウいふ顔であつたか、又何歳位イであられたか、ドウしても思ひ浮べられず、白髪雜りの太い長い眉毛と優しい眼と丈けが彷彿するのみである。思へば人の記憶などといふものは隨分儚いものではある。

併し、古人の傳記など讀んで見ると、六歳にして詩を賦したとか、立派な文章を作つたとかいふ樣な事が書いてある。アレは、其人が偉い人であつたといふ事を現はす爲めに後人がイ、加減に書いた——賴朝公御十三歳の時の頭骸骨の類のものではあるまいか。然らざれば僕の如きは隨分の鈍骨であつたといはねばならぬ。

何れにしても僕が小供の時に既に前後二回十八史略を讀んだ事のある丈けは事實であると同時に、其二回共に全く無我夢中で唯讀んだといふ記憶丈けが殘つて居るといふ事も事實である。

其後中學時代、高等學校時代、大學時代には全然十八史略などは思ひ出した事もなかつた。

然るにイツの頃の事であつたか、又何處であつたか、又如何なる機會であつたか、又ソレが原文であつたか、和譯であつたか全然記憶はないが、妙な機會に、十八史略のドコかを讀んで、何だ

か大變面白いと思ふて、ソレを友人と雜談の時の話の種子にして何度も〳〵話した事があつて、ソレから、又ドコか外の場所を讀んで又話の種子にしい〳〵した樣であつたが、其中に、之も何時であつたとも、何處であつたとも覺えぬが、久保天隨の假名雜りに譯した十八史略の袖珍本を手に入れて、ソレを始めから終りまで讀んで、非常に興味を感じて、無論、不勉强で有名な程の僕の事であるから、一氣に讀破するなんどいふ事は出來もせず、又しようともしなかつたが、丁度ソレが袖珍本でポケットに入れて歩行くのに適して居つたので、イツも〳〵夫れを持つて歩行いて、

思ひ出しては讀み、暇さへあれば讀みして、トウ〳〵ソノ本の綴お目がボロ〳〵になつた。

ソレから其本をドコへやつたか――忘れたか、落したか、イツの間にか其本は失つて仕舞つたが、其後になつて、大正六年に衆議院の議員團の一員として、後にシヤムの公使になつた故政尾藤吉博士を團長とする一行に加はつて、故望月小太郎君、故山根正次君及び植原悅二郎君等と共にアメリカへ行つた時に旅行中の讀物の一つとして持つて行つたのが矢張り久保氏の和譯十八史略の袖珍本で、ソレは日本橋の至誠堂で發行したものであつた。

ソノ本はソノ時の旅行中から、歸朝後にかけ、大正十二年の大震災の時迄で持つて居て、慥か十一回位イ讀んだかと記憶して居る。讀み始める時には、必ず本の第一頁の餘白に大正……年…月…日始むと書き、讀み終つた時には又必ず…年…月…日讀了と記す樣にして居たから、今ソレがあれば、少くとも自分丈けには、好個の記念品である譯だが、惜しい事に、アノ大震火災で、他の屋財家財と共に一括烏有に歸せしめて仕舞ふた。

震災後匆忙の際、ドコで手に入れたか、當時既に十八史略愛讀者といはんよりは寧ろ十八史略信者といふ程になつて居た僕は、又久保天隨氏譯十八史略袖珍本の携行者となつて居て、一昨々年の暮頃迄、例の通り、…年…月……日始む――……年……月……日讀了と記しつゝ十一回の中途の頃、尾籠な話で恐縮であるが、朝の行事の一つである用便中不覺にもソノ本を便器の中へ落して仕舞つた。實はソノ本には、單に讀始讀了の年月日の記入許りでなく、欄外へイロ〳〵所感樣の事柄をも記入して居たので、惜くて仕樣がなかつたが、ドウする事も出來ず、ナニアノ本なら至誠堂へ行けば又得られるからと簡單に思ふて諦めたのであつたが、サテ至誠堂へ電話をさせて見ると、何ぞ計らん、至誠堂といふ書

店はモウ餘程以前に廢業して居たので、心當りの古本屋で搜して見たが、生憎と仲々手に入らず、ソノ内に、凡そ四五種の袖珍本十八史略を購入したが、何れも久保氏の分の様にないので、少からず失望して執着を禁じ能はず、兎もすれば知友との雜談中に其話をして、若し久保氏譯の袖珍本を見付けてもしたら知らして貰ひ度いナドいつて居た所、一昨年の五月十一日風月堂の常連の楕圓テーブルで、津村秀松博士がソノ本なら二三日前に大學正門前の古本屋で見たといはれたので、食後直ぐに其本屋へ行つて、第三册目の久保氏譯袖珍本十八史略を入手し得て、故人に廻り遭ふた思ひをして早速ソノ歸りの車の中から讀み始め、爾來第二回目を本年一月二十日議會再開の前日に終つた次第で、中途何回であつたかは記憶せぬが、小供時代の二回を合すれば記憶に存して居る丈けで、實に前後二十三回半以上讀んだ譯である。古人の諺に讀書百遍意自ら通ずとあるが、如何に鈍物の僕でも、是れ丈け讀んだら、人から十八史略博士などと冷評されるのも強ち理由なき事ではあるまい。ト同時に少くとも、十八史略について僕が一家言を有し、又ソレを書き若くは語つたからといふて強ち僭越とも云はれまいと思ふ。

宋初の名臣趙普は朝に大議ある毎に必ず戸を閉ぢて一室に籠り自ら一篋を啓き一書を取り出して之を閲讀した。家人が不思議に思ふて其死後に其篋を開けて見たら、ソレは論語であつたといふ、彼れは嘗て大宗皇帝に謂ふのに臣に一部の論語があります、其半部を以て御父太祖を佐けて天下を定め、其半部を以て陛下を佐けて太平を致しますといふたとある。論語は聖人の問答錄であるから爲政家の教科書として適當たる事勿論である。併し論語は所謂論語で理窟が多い――寧ろ理窟許りである。理窟許りで事實の記述がない。ソコに行くと十八史略は記述である。――支那幾千年

間の出來事の記述である。事實の記載であるから隨分無駄の處もある。又馬鹿々々しい事もある。中には所謂白髮三千丈式で事實とは信ぜられぬ事も澤山ある。あるけれども又ソコにいふにいはれぬ、理窟では解かれぬ理外の理も澤山にある。孔夫子が千萬歲に師表として世界に君臨する大家でありながら時の政治――現實の政治家として鄭の子產にも及ばなかつた所以、又之を後世としては論語崇拜の趙普自身にも及ばなかつた所以は十八史略を見て始めて知る事が出來る。孔子になつて信者を後世に求め、治國平天下の理論を宣布せんとする者は論語を讀むべきである。若し志

を當世に存じ眼前の社會を平和に安定に致さんとする者は十八史略を讀むべきである。之れが僕の愚見である。

十八史略は讀んで字の如く史記漢書以下十八の史書の抄略である。故に著者曾先之も編といふて、著とも述ともして居ない。從つて其歴史書としての價値とか抄略の仕方とかについて議論すれば隨分議論もあろうと思ふ、併し上下四千年に亙る大民族の政治的の動きを簡略に叙述した著作としては世界を通じて恐らく十八史略に及ぶものはなかろう。殊に其重點を各時代に活躍せる重要人物に置き、其言行性格を描出するに努めたる點は他の追隨を許

さゞる所である。

僕の鄕國の大森といふ所に、五百羅漢の御堂がある。五百體あるかドウか數へた事はないが、可なり澤山の羅漢像が安置してある。其羅漢堂に參拜して見て居るとキツと、其中に自分の叔父さんとか何とか會ひ度いと思ふ近親の者が居るといはれて居る。十八史略を讀むで居ると自分の知つて居る政治家がキツと居る。忠臣も居る、良臣も居る、逆臣も居る、破廉恥漢も居る、馬鹿も居る、阿呆も居る、而して英雄も居る、豪傑も居る、學者あり、哲人あり、奇人あり、變人あり、凡そ考へ得る如何なる種類の人間

でも其の見本が皆出て來る。豈に啻に五百羅漢堂に於ける叔父さんや祖父さんのみならんやである。ソコに十八史略の値打があり、ソコに十八史略の妙味がある。例へば嚴島神社の社殿の廻廊に掲げてある八方睨みの鹿の畫の如く、見る人見る人に異なりたる印象と感銘とを與へる。

併し僕の經驗では――一體名著とか傑作とかいふものは皆なソウであるが、十八史略は何度も〳〵讀まねば眞味が解らぬ樣である。古人は熟路百遍名山を知らずといふたソウであるから、論語讀みの論語知らず――何遍讀んでも解らぬものは解らぬかも知れぬが、十八史略丈けはソウでないと思ふ。讀む度に味が違ひ、讀むに從つて面白くなるから――ソレがウソと思ふなら試みに始めて見られよ、此ポケット用の袖珍本こそ僕が其意味其目的から特に思ひ付いて作つたのであるから、是非々々御勸めする次第である。

昭和十二年三月二十三日

譯評者識

『改訂版』序

實は本書の初版は昭和十二年の四月に出來上つたのであるが、用紙の撰擇を誤つた爲め、製本して見ると少し部厚となり、提携に不便な感じがしたので、遣り直しする事にして、ソレが出來上つたのが、其年の十一月三日であつた。其時は丁度今次事變勃發後間もなくで、北支方面の局部的出來事が、漸く、中支方面に擴大して、行

く先きドウなるかを思はしむるモノがあり、一般國民を
して、第六感的に、今度は簡單には片付かないかも知れ
ぬといふ樣に感ぜしめて居る時であつたので、折角出來
上つたけれども、發賣の方は暫く差し控へる事にして居
る内に、第一次の近衞内閣は更迭し、平沼内閣、阿部内
閣から米内内閣になつて、圖らずも自分は再び臺閣の人
となるに至つたが、その米内内閣も妙な行きサツから更
迭して、現内閣—第二次近衞内閣となつた。其間三年有

餘—足掛け五年の間に於ける内外の形勢を見ると、眞に
文字通り走馬燈の如くで、常識では到底想像さへも出來
ぬ程の大變化を眼前に見る事となつた。有爲轉變は世の
習ひとは云ひながら、凡そ此四五年間の變轉こそは、モ
ノの勢ひとは申せ、所謂オ釋迦樣でも御存じない所であ
らう。神功皇后の三韓征伐、北條時宗の元寇擊退、豐太
閤の朝鮮征伐から、數百年にわたる倭寇の中南支沿岸侵
略、山田長政、呂宋助左衞門等々大和民族の大陸進出の

史實は隨分澤山あるが、軍紀嚴肅なる百萬皇軍の陸の大部隊が、北支蒙疆から支那四千年の歴史的事象の中心たる所謂中原の要地を押へ、更に南支一帶に亘りて—支那本部の殆ど全部を其勢力下に置くのみならず、幾十萬噸の海の精鋭が全支那海から南洋一帶に及ぶ幾千海里の封鎖線を劃して、蟻の這ひ入る寸隙をも餘さぬといふやうな大規模の作戰が成し遂げられやうとは、神ならぬ人間がドウして豫知し得たであらうか。驚きはソレ許りでは

ない。二十年前の戰敗國獨逸が、僅々七八ケ年のナチス政權の治下に—如何にヒツトラーがエライ男だといふたとて、イツの間にか、底の知れぬ程の軍備を整へ、右の手にソ聯を押へながら、左の手では、電擊又電擊、老英帝國を完全に歐洲大陸からノツクアウトし、强豪フランスを蹂躙して、思ひ出多きコンペーユの森の同じ場所の同じ列車の中で、休戰條約に調印せしめて、吳越勝敗の史實を碧眼獨裁のヒ總統とペタン首席將軍との主演でデビ

ユウーしやうなどと誰れが夢にでも見得る者があつたであらう。知つたか振り先生達の中には、イヤ俺はソノ位イの事にはなると思ふて居たとか、現に何時何處でコウいふ事を話した事があるではないかなどといふ輩もないではあるまいが、ソレは皆ソウいふ癖や、病的の頭腦の持主達の事で、苟くもノーマルコングイシヨンの君子人としては、實に世界開闢以來未だ曾てなき大變轉といふの外はない。乃ち其變轉たるや、内にも外にも、日支の

關係に於ても、世界の情勢に於ても、眞に所謂前代未聞の大事變大爭亂ではあるが、其縮圖ともいふべき幾多の實例がチヤンとコノ十八史略記する所の支那の歷史上の出來事の上に見る事が出來るのは、又實に不思議な位イである。

日獨伊三國同盟、對蘇、對英、對米、對バルカン諸邦、對南洋諸屬領。凡そ是等の關係を研究檢討せんと欲する者は、退いて先づ數時間を割愛して、周末秦初―春秋戰

國數百年間の起伏の經緯を讀んで見られよ。更に、支那事變の落着＝蔣介石の處置、占領地域内の宣撫工作、新中央政府關係＝大和民族として漢民族を如何に遇すべきかの問題＝百年千年變らざる對支根本策の研究者考案者達は、少くとも晋末に於ける五胡十六國の興亡史と、宋末、元初＝契丹、女眞から蒙古族の勃興に至る經過を一讀再讀するの必要がある。古來揚子江は外來民族を溶解する漢民族の坩堝といはれて居る。他民族は勢ひよく侵

入するが、侵入して武漢から南京一帶揚子江沿岸に本據を安堵する時が、イツでも彼等が、漢民族化される時で、其漢民族化された時が、卽ち次の新興勢力に代られる時である。蒙古族の生んだ最大の武將にして大政治家であつた元の世祖忽必烈が、全支那に蒙古字學を建設して、蒙古魂を漢人の頭腦に植付けんとしたのは、千古曾てなき卓越せる治漢策と思はれたが、彼等蒙古人の勢力は今何處に殘つて居るか。女眞族の北支に侵入するや、中國

の難治を知りて、ロボット皇帝劉豫を北京に擁立し、所謂以漢治漢の方策を採用した。而して劉豫は亦相當の男であつた。併し其結果は果して如何であつたか。遠交近攻は支那人の發明した外交策であつたことを知らねばならぬ。彼等は數千百年前から夫れを實地に毎度行つて居る。合縱連衡も支那人の考案である。本家は彼等である。孫子も吳子も、蘇秦も張儀も、老、孔、孟、莊、皆支那人である。漢民族である。司馬溫公も、王安石も、程子

も、朱子も、王陽明も、陸象山も皆支那人であり漢民族である。始皇も、高祖も、項羽も、韓信も、張良も、范增も、玄德も、曹操も、孔明も、仲達も、關羽も、張飛も、李世民も、朱元璋も、岳飛も、文天祥も皆漢人である。更に遠くは堯舜禹湯、武王も周公も大公望も皆漢人であるから、漢語を話し、漢文を書き漢文を讀んだ者許りである。ソレ等の歷代の英雄傑士の感化が、現在の漢民族―現在の支那人に、如何に深く浸透して居るかを、

十二分に呑み込んでの上でなくて、ドウして支那人を扱ひ、支那人と交り、中華民國と永く交誼を續け得る事が出來やうか。ソレは恰も天孫降臨から、神武の御創業、御歴代聖天子の下に幾千年撫育せられ、日本武尊や、武内宿禰や、鎌足や、清麿や、義家や、頼朝や、弘法や、親鸞や、日蓮や、時宗や、正成や、義貞や、信玄や、謙信や、信長や、秀吉や、家康や、光圀や、子平や、松蔭や、西郷や、木戸や、大久保や等々の、日本語を話し、

日本語を書き、日本語を讀む日本人―大和民族の生んだ英雄傑士等の、言行、行狀に感化せられ、育成せられた、此大和民族の日本魂を解得せずして、日本人を扱はんとするのと同樣である。日本人を知らんとする者は何を措いても日本の歴史を知らねばならぬ如く、支那人を知り支那人を扱はんとする者は、何を措いても、支那の歴史を知らねばならぬ。而してソレには第一番の早途は、此十八史略を讀む事である。少なくとも支那を知る手引と

して―縱の支那を知る道案内として、十八史略以上のものはない。之れが自分の確信である。

事變關係で支那大陸へ行つた人、行く人は無數である。併しながら、夫等の人々は皆橫の支那―平面の支那を見得る丈けである。橫の支那―平面に支那を知つた丈けでは、支那を知つたとは申されぬ。タトへ簡單でも縱の支那を知るにあらざれば、對支の大計長策は立たぬ筈である。卽ち玆に拙者が用紙不自由なる現下の出版界に於て

敢て此書を改訂出版して大方有志に薦むる味噌がある。自分もモウ本年六十五歲である。相當頑健の方ではあるが、實は餘命幾何かあるである。又之れから大陸に渡りて何をする事も出來やうとは思はれぬが、自分の推薦に從つて本書を讀む人―殊に靑壯有爲の人達の中には、必ずや對支政策―萬代不易の對支政策を案出し、日滿支團結、東亞共榮圈確立、而して大東亞新秩序の建設、因て以て世界永遠の平和樹立に貢獻して、八紘一宇の大理想

の顯現を成就するの機緣に遭遇し得る人が出て來る事を確信する次第である。

皇紀二千六百一年紀元節の夜識了

譯評者　硯堂學人

注意

一、緒言に於て述べて居る通り興味を本位として、原文の儘では讀み惡いので便宜之を和文に譯したのであるから、成るべくスラ〳〵讀める樣に譯した積りであるが、併し矢張り譯文であつて講義ではないから、可なり意味の不明瞭と思はるゝ點のある事は免れない。

一、從て數ヶ所欄外に註解を加へても見たが何分袖珍本で餘白が少いので思ふ樣に出來なかつたのはドウも遺憾である。

一、評言もモ少し詳しく且つ多く書き加へたかつたけれども、ヤ、もすればゴ獨りヨガリになり却て讀者の眼ザワリになるかも知れぬと思ふてワザ

と遠慮した次第である。

一、是れ迄僕の見た十八史略には皆色々と序文外にも前置が載せられて居る。例へば十八史とは史記と漢書と何と何とであるとか、十八史略の原本はドウであるとか、編者曾先之とは如何なる人であるとかいふが如きの類である。併し僕はソレ等の類のものは一切省略する事にした。ソレは緒言中にいふた如く、僕は十八史略を絶好の讀み物として政治家諸君に勸めたい爲めに特にコンなポケット用に仕立てさせた位イで、之を歴史學の參考書といふ樣な意味に考へなかつたからである。

一、併し一旦大方の翻讀に供した後、モツと色々專門的詮穿を加へるのがヨイとなれば或は他日付け加へるかも知れぬ。

評譯

十八史略

目次

卷之一

太古……一
三皇……二
太昊伏羲氏……二
炎帝神農氏……四
黃帝軒轅氏……五
五帝……七
少昊金天氏……七
顓頊高陽氏……七

帝嚳高辛氏……八
帝堯陶唐氏……九
帝舜有虞氏……一一
夏后氏……一三
殷……一八
周……二五
春秋戰國……三九
吳……四〇
蔡……四五
曹……四五
宋……四五
魯……四七
衛……五七
鄭……五九
晉……五九
陳……六二
齊……六二
田氏齊……六六
趙……七七
魏……九二
韓……一〇〇
楚……一〇一
燕……一〇六
秦……一一一

卷之二

秦……一三三
始皇帝……一三三
二世皇帝……一三三
西漢……一四二
太祖高皇帝……一四三
孝惠皇帝……一八九
孝文皇帝……一九二
孝景皇帝……一九九
孝武皇帝……二〇二
孝昭皇帝……二三三

卷之三

孝宣皇帝……二三八
孝元皇帝……二四七
孝成皇帝……二五三
孝哀皇帝……二五八
孝平皇帝……二五九
孺子嬰……二六〇
東漢……二六九
世祖光武皇帝……二六九
孝明皇帝……三〇一
孝章皇帝……三〇七

孝和皇帝……三〇九
孝殤皇帝……三一三
孝安皇帝……三一三
孝順皇帝……三一八
孝冲皇帝……三二一
孝質皇帝……三二一
孝桓皇帝……三二一
孝靈皇帝……三二四
孝獻皇帝……三四〇
三國……三五四
漢 附魏吳二僭國……三五四
昭烈皇帝……三五五

卷之四

後皇帝……三六八
西晉……三七六
世祖武皇帝……三七六
孝惠皇帝……三八二
孝懷皇帝……三九三
孝愍皇帝……三九五
東晉……三九七
中宗元皇帝……三九七
肅宗明皇帝……四〇六
顯宗成皇帝……四一〇

康皇帝……四一九
孝穆皇帝……四一〇
哀皇帝……四一九
帝奕……四一九
簡文皇帝……四二九
烈宗孝武皇帝……四三一
安皇帝……四三二
恭皇帝……四四一
南北朝……四四八
宋……四四九
齊……四五〇
梁……四六三
……四六七

卷之五

陳……四八〇
隋……四八八
唐……五〇一
高祖神堯皇帝……五〇一
太宗文武皇帝……五〇一
高宗皇帝……五一三
中宗皇帝……五二六
睿宗皇帝……五三九
玄宗明皇帝……五四九
肅宗皇帝……五五一
……五六五

代宗皇帝……五七一
德宗皇帝……五七七
順宗皇帝……五八八
憲宗皇帝……五八九
穆宗皇帝……五九五
敬宗皇帝……五九六
文宗皇帝……五九六
武宗皇帝……六〇一
宣宗皇帝……六〇七
懿宗皇帝……六一一
僖宗皇帝……六一三
昭宗皇帝……六一八

卷之六

哀皇帝……六一三

五代

梁……六一五
太祖皇帝……六一五
均王……六二一
唐……六二五
莊宗皇帝……六二五
明宗皇帝……六四一
閔帝……六四四
潞王……六四五

晉
高祖皇帝……六四六
出帝……六五〇
漢
高祖皇帝……六五三
隱帝……六五四
周
太祖皇帝……六五六
世宗皇帝……六五九
恭帝……六六一
宋
太祖皇帝……六六九
太宗皇帝……六七〇
眞宗皇帝……六七〇
仁宗皇帝……七一八
英宗皇帝……七三五
神宗皇帝……七三七

卷之七

宋
哲宗皇帝……七六一
徽宗皇帝……七六一
欽宗皇帝……七七八
南宋……七九七
……八〇七

高宗皇帝……八〇七
孝宗皇帝……八四〇
光宗皇帝……八四七
寧宗皇帝……八四九
理宗皇帝……八六四
度宗皇帝……九〇四
孝恭懿聖皇帝……九一七
端宗皇帝……九二六
帝昺……九三三
以上

十八史略 卷之一

曾先之編
島田俊雄譯評

太古

元

【天皇氏】木德を以て王たり。歳攝提より起る。無爲にして化す。兄弟十二人、各一萬八千歳。

【地皇氏】火德を以て王たり。兄弟十二人、各一萬八千歳。

【人皇氏】兄弟九人、分つて九州に長たり。凡そ一百五十世、合せて四萬五千六百年。

註　九州とは冀、兗、青、徐、揚、荊、豫、梁、雍にして、卽ち支那本部全體なり

人皇以後【有巢氏】といふものあり、木を構へて巢を爲り、木實を食ふ。【燧人氏】に至り、始めて燧を鑽つて、人に火食を敎ふ。書契以前に在り。年代國都、攷ふべからず。

家族生活の始　火食の始

三　皇

太昊伏羲氏

【太昊伏羲氏】風姓。燧人氏に代つて王たり。蛇身人首。始めて八卦を畫し、書契を作り、以て結繩の政に代ふ。嫁娶を制し、儷皮を以て禮となす。網罟を制して佃漁を敎へ、犧牲を養ひ庖廚を以ふ。故に庖犧といふ。龍の瑞あり、龍を以て官に紀す、龍師と號す。木德の王たり。陳に都す。

占卜の始　文書の始　嫁娶の始　漁業の始　料理の始

庖犧崩ず。【女媧氏】立つ。亦風姓、木德の王たり。始めて、笙簧を作る。諸侯に共工氏あり、祝融と戰ひ、勝たずして怒る。乃ち頭を不周山に觸れて崩ず。天柱折け、地維缺く。女媧、乃ち五色の石を鍊りて以て天を補ひ、鰲の足を斷ちて以て四極を立て、蘆灰を聚めて以て、滔水を止む。是に於て、地平かに、天成つて、舊物を改めず。

晉樂の始　戰亂の始　天柱折け地維缺く

女媧氏沒す。【共工氏】【太庭氏】【柏皇氏】【中央氏】【歷陸氏】【驪

連氏】【赫胥氏】【尊盧氏】【混沌氏】【昊英氏】【朱襄氏】【葛天氏】【陰康氏】【無懷氏】あり。風姓相承くるもの、十五世。

炎帝神農氏

農畊の始
祭神の始
醫藥の始
商業の始

【炎帝神農氏】姜姓。人身牛首。風姓に繼で立つ。火德の王たり。木を斲つて耜となし、木を揉げて耒となし、始めて畊を敎へ、蜡の祭を作す。赭鞭を以て草木を鞭ち、百草を嘗めて、始めて醫藥有り。人をして、日中に市を爲し交易して退かしむ。陳に都し、曲阜に徙る。【帝承】【帝臨】【帝則】【帝百】【帝來】【帝襄】【帝榆】に傳ふ。姜姓、凡そ八世、五百二十年。

黃帝軒轅氏

簒奪の始

運輸交通の始

【黃帝】公孫姓、又曰く姬姓。名は軒轅、有熊國の君、少典の子なり。母、大電の北斗の樞星を繞るを見、感じて帝を生む。炎帝の世衰へ、諸侯相侵伐するや、軒轅、乃ち干戈を用ゆるを習ひ、以て不享を征す。諸侯咸く之に歸す。炎帝と阪泉の野に戰ひ、之に克つ。蚩尤、亂を作す。其人、銅鐵の額、能く大霧を作す。軒轅、指南車を作り、蚩尤と涿鹿の野に戰つて之を禽にし、遂に炎帝に代つて天子となる。土德の王たり。雲を以て官に紀し、雲師となす。舟車を作り、以て通ぜざるを濟す。風后を得て相となし、力牧を將とな

甲子の始
暦の始
算數の始
音律の始

す。河圖を受く。日月星辰の象を見て、始めて星官の書あり。師大撓、斗の建を占うて、甲子を作る。容成は暦を造り、隸首は算數を作り、伶倫は嶰谷の竹を取つて、十二律の筩を制し、以て鳳鳴を聽く。雄鳴六、雌鳴六、黄鐘の宮を以て、六律、六呂を生じ、以て氣の應を候ひ、十二鐘を鑄て、以て五音を和す。

夢に華胥に遊ぶ

嘗て、晝寢ね、夢に華胥の國に遊び、怡然として自得す。其後、天下大に治まり、幾んど華胥の若し。

世に傳ふ。黄帝、銅を采つて、鼎を鑄、鼎成るや、龍あり、胡髯を垂れて、下り迎ふ。帝、龍に騎して、天に上る。群臣後宮從ふ者七十餘人、小臣上るを得ず、悉く龍髯を持す。髯拔く。弓を墮す。その弓を抱いて號く。後世。その處を名づけて鼎湖といひ、その弓を烏號といふ。

註　世紀に曰く黄帝在位百年　西紀前二二〇〇頃

黄帝、二十五子あり。その姓を得たるもの十四。

註　世紀に曰く少昊在位八十四年

五　帝

少昊金天氏

【少昊金天氏】名は玄囂、黄帝の子なり。亦た青陽といふ。其立つや、鳳鳥適ま至る。鳥を以て官に紀す。

顓頊高陽氏

註 世紀に曰く顓頊在位七十八年

孟春を元と爲す

【顓頊高陽氏】昌意の子、黄帝の孫なり。少昊に代つて立つ。少昊の衰ふるや、九黎德を亂し、民神雜糅して、方物すべからず。顓頊之を受け、乃ち南正重に命じ、天を司つて以て神を屬し、火正黎は地を司つて以て民を屬し、相侵し瀆すことなからしむ。始めて、曆を作り、孟春を以て元となす。

帝嚳高辛氏

註 世紀に曰く帝嚳在位七十五年

【帝嚳高辛氏】玄囂の子、黄帝の曾孫なり。生まれて神靈。自ら其名を言ふ。顓頊に代つて立ち、亳に居る。

帝堯陶唐氏

評 堯の舜に優る所以茲に在り

旬朔の始

【帝堯陶唐氏】伊祁姓。或は曰く名は放勛、帝嚳の子なり。其仁、天の如く、其知、神の如し。之に就けば、日の如く、之を望めば、雲の如し。平陽に都す。茆茨剪らず、土階三等。草あり、庭に生ず。十五日以前は、日に一葉を生じ、以後は日に一葉を落し、月小盡すれば、一葉厭して落ちず、名けて蓂莢といふ。之を觀て、旬朔を知る、天下を治むる五十年。天下治まるか、治まらざるか、億兆己を戴くを願ふか、己を戴くを願はざるかを知らず、左右に問ふも知らず。外朝に問ふも知らず。在野に問ふも知らず。乃ち微服して康衢

童謠の始

鼓腹擊壤

に遊び、童謠を聞く。曰く、立二我烝民一。莫レ匪二爾極一。不レ識不レ知。順二帝之則一。と。老人あり、哺を含んで鼓腹し、壤を擊つて歌うて曰く、日出而作。日入而息。鑿レ井而飲。畊レ田而食。帝力何二有於我一哉。と。

聖人

華に觀ぶ。華の封人曰く、嘻、請ふ聖人を祝せむ。聖人をして、壽富にして、男子多からしめむ。堯曰く、辭す。男子多ければ則ち懼多く、富めば則ち事多く、壽なれば則ち辱多し。封人曰く、天、萬民を生じ、必ず之に職を授く。男子多くとも、之に職を授くれば、何の懼か之あらむ。富むとも、人をして、之を分たしめば、何の事か之あらむ。天下道有れば、物と與に皆昌へ、天下道無ければ、德

評

支那獨特の社會觀と人生觀

を修めて、閒に就く。千歲世を厭はば、去つて上僊し、彼の白雲に乘じて、帝鄉に至る、何の辱か之あらむと。

堯立つて七十年、九年の水あり。鯀をして、之を治めしむ。九載、績あらず。

丹朱不肖なり

讓位の始

堯、老いて、勤に倦む。四嶽舜を擧げて、天下の事を攝行せしむ。堯の子、丹朱、不肖なり、乃ち舜を天に薦む。堯崩ず。舜、位に卽く。

帝舜有虞氏

【帝舜有虞氏】姚姓。或は曰く名は重華。瞽瞍の子、顓頊六世の孫

舜の德

なり。父、後妻に惑ひ、少子象を愛し、常に舜を殺さむと欲す。舜孝悌の道を盡し、烝烝として乂めて姦に格らしめず。歷山に畊すや民、皆畔を讓る。雷澤に漁するや、人、皆居を讓る。河濱に陶するや、器、苦窳せず。居る所、聚を成し、二年邑を成し、三年都を成す。堯、之が聰明を聞き、畎畝に擧げ、妻はすに、二女を以てす。

娥黃女英

娥黃女英といふ。嬀汭に釐降す。遂に堯に相として、政を攝す。驩兜を放ち、共工を流し、鯀を殛し、三苗を竄し、才子、八元八愷を擧げ、九官を命じ、十二牧に咨り、四海の內、咸な舜の功を戴く。五弦の琴を彈じ、南風の詩を歌ひ、而して、天下治まる。詩に曰ふ、

南風の詩

南風之薰兮。可以解吾民之慍兮。南風之時兮。可以阜吾民之財兮。時に景星出で、卿雲興る。百工相和して歌うて曰く、卿雲爛兮。禮縵縵兮。日月光華。旦復旦兮。と。

商均不肖

舜の子商均、不肖なり。乃ち禹を天に薦む。舜、南に巡狩し、蒼梧の野に崩ず。禹、位に卽く。

禹治水

夏后氏

【夏后氏禹】姒姓。或は曰く名は文命。鯀の子、顓頊の孫なり。鯀洪水を湮ぐ。舜、禹を擧げて鯀に代らしむ。身を勞し、思を焦し、外に居ること十三年。家門を過ぐれども入らず。陸行には車に乘り、水行には船に乘り、泥行には橇に乘り、山行には樏に乘り、九道を

註 治水は五千年來支那政治の中心課題たり

評 堯舜禹湯、德各異なる。皆時世の進化之を然らしむる也

通じ、九澤を陂し、九山を度り、その成功を告ぐ。舜、これを嘉し百官を率ゐて、天下の事を行はしむ。舜、崩ず。乃ち位を踐む。聲は律と爲り、身は度と爲る、準繩を左にし、規矩を右にす。一饋に十たび起ち、以て天下の民を勞す。出でて、罪人を見る。車を下り、問うて泣いて曰く、堯舜の人は、堯舜の心を以て心となす。寡人君となるや、百姓各自ら其心を以て心となす。寡人これを痛むと。

酒の始

古、醴酪あり。禹の時に至つて、儀狄、酒を作る。禹、飲んで之を甘しとす。曰く後世必ず酒を以て國を亡ぼす者あらむと。遂に儀狄を疏んず。

九鼎を鑄る

命を天に受く

生は寄なり死は歸なり

九牧の金を收めて、九鼎を鑄、三足は三德に象り、以て上帝鬼神を享す。諸侯を塗山に會す。玉帛を執る者萬國。

禹、江を濟る。黃龍、舟を負ふ。舟中の人懼る。禹、天を仰いで、歎じて曰く、吾、命を天に受け、力を竭して、萬民を勞ふ、生は寄なり、死は歸なりと。龍を視ること、猶ほ螾蜒のごとく、顏色變せず。龍、首を俛し、尾を低れて逝く。南巡して、會稽山に至つて崩ず。

子【啓】賢なり。能く、禹の道を繼ぐ。禹、嘗て、益を天に薦む。謳歌し、朝覲する者、益に之かずして、啓に之く。曰く、吾が君の

子なりと。啓、遂に立つ。有扈氏、無道なり。啓、與に甘に戰ふ。啓、崩ず。子【太康】立つ。盤遊して返らず。有窮の后羿、其弟【仲康】を立て、其政を專らにす。羲和、義を守つて服せず。羿、王命を假り、胤侯に命じて、之を征す。仲康崩ず。子【相】立つ。羿、相を逐うて自立す。嬖臣寒浞、又羿を殺して自立す。相の后は、有仍國君の女なり。方に娠めり、有仍に奔つて【少康】を生む。其後、少康、田一成、衆一族にして、禹の績を復す。

少康、田一成衆一族にして復興す

少康以來、【王杼】【王槐】【王芒】【王泄】【王不降】【王扃】【王廑】を歷て、【王孔甲】に至る。鬼神を好み、淫亂を事とす。夏の德衰ふ。

桀と末喜

評　女色滅國

肉山脯林
酒池糟堤

政治革命の始

天、二龍を下す、雌雄あり。陶唐氏の後、劉累といふ者あり。龍を擾すを學び、以て孔甲に事ふ。之に姓を賜うて御龍氏といふ。龍一雌死す。潛に醢とし、以て孔甲に食はしむ。復た之を求む。累、懼れて逃る。

孔甲の後、【王皐】【王發】【王履癸】を歷、號して桀となす。貪虐なり。力能く鐵鉤の索を伸ぶ。有施氏を伐つ。有施、末喜を以て女はす。寵あり、言ふ所皆從ふ。傾宮瑤臺を爲り、民財を殫くす。肉山脯林、酒池以て船を運すべく、糟堤以て十里を望むべく、一鼓して牛飲する者三千人。末喜、以て樂となす。國人大に崩る。湯、夏を伐つ。桀、鳴條に走つて死す。夏、天子たること、一十

有七世、凡そ四百三十二年。

殷

湯王　西紀前一、七六〇

【殷王成湯】子姓、名は履。其先を契といふ。帝嚳の子なり。母は簡狄、有娀氏の女。玄鳥の卵を墮すを見、之を呑んで契を生む。唐虞の司徒となり、商に封せられ、姓を賜ふ。昭明、相士、冒若、曹圉に傳へ、冥といひ、振といひ、微といひ、報丁、報乙、報丙、主壬、主癸といふ。主癸の子天乙、これを湯となす。始めて、亳に居り、先王の居に從ふ。人をして、幣を以て、伊尹を莘に聘せしめ、これを夏桀に進む。用ゐず、尹、湯に復歸す。桀、諫むる者關龍逢を殺す。湯、人をして、之を哭せしむ。桀怒り、湯を召して、夏臺に囚す。已にして、釋さるるを得たり。

湯出づ。網を四面に張つて之を祝するものあるを見る。曰く、天より降り、地より出で、四方より來る者は、皆、吾が網に罹れと。湯曰く、嘻、これを盡せりと。乃ちその三面を解き、改め、祝して曰く、左せむと欲せば左せよ、右せむと欲せば右せよ、命を用ゐざる者は、吾が網に入れと。諸侯、之を聞いて曰く、湯の德、至れり、禽獸に及ぶと。

伊尹、湯に相として、桀を伐ち、之を南巢に放つ。諸侯、湯を尊んで天子となす。

諫者關龍逢

評　湯の至言、彼が政聖たる所以

大に旱すること七年、太史これを占して曰く、當に人を以て禱るべし。湯曰く、吾が、爲に請ふ所の者は、民なり。若し必ず人を以て禱るならば、吾請ふ、自ら當らむと。遂に齋戒して、爪を剪り、髮を斷ち、素車白馬、身に白茅を嬰け、身を以て犧牲となし、桑林の野に禱り、六事を以て自ら責めて曰く、政、節あらざるか。民、職を失へるか。宮室、崇きか。女謁盛なるか。苞苴行はるるか。讒夫、昌なるかと。言未だ已まざるに、大に雨ふること、方數千里。湯崩ず。太子【太丁】早く卒す。次子【外丙】立つ。二年にして崩ず。弟【仲壬】立つ。四年にして崩ず。太丁の子【太甲】立つ。不明なり。伊尹、之を桐宮に放つ。憂に居ること三年、過を悔い、自ら責む。

湯、六事を以て自ら責む

評　伊尹周公は同功一體の人

妖不レ勝レ德

遷都

尹、乃ち奉じて、亳に歸し、德を修む。諸侯、これに歸す。太甲より【沃丁】【太庚】【小甲】【雍己】を經て、【太戊】に至る。亳に祥あり。桑と穀と朝に共生し、一日の暮に、大さ拱なり。伊陟曰く、妖は德に勝たず。君、それ德を修めよと。太戊、先王の政を修む。二日にして、祥桑枯死す。殷道復た興る。號して、中宗と稱す。

太戊より【仲丁】【外壬】を歷て【河亶甲】に至る。水患を避けて桐に遷る。【祖乙】に至り、耿に居る。又耿に圮らる。【祖辛】【沃甲】【祖丁】【南庚】【陽甲】を歷、【盤庚】に至り、耿より復た亳に遷る。殷道復た興る。

盤庚より【小辛】【小乙】を歴て【武丁】に至る。夢に良弼を得たり。說といふ。說、胥靡の爲に傅巖に築く。求めて、之を得、立てて相と爲す。武丁、湯を祭る。飛雉あり、鼎に昇つて雊く。武丁懼れて、己に反る。般道復た興る。號して、高宗と稱す。

武丁より【祖庚】【祖甲】【廩辛】【庚丁】を歴て【武乙】に至る。無道なり。偶人を爲つて、之を天神といひ、之と博し、人をして、爲に行はしめ、天神勝たざれば、乃ち之を僇辱し、革囊を爲つて、血を盛り、仰いで之を射、命づけて天を射るといふ。出でて獵するや、暴雷の爲に震死す。

【太丁】【帝乙】を歴て【帝辛】に至る。名は受、號して紂となす。

紂王

玉杯象箸
酒池肉林爲長夜飲
妲己
苛斂誅求

資辯捷疾、猛獸を手搏す。智は以て諫を拒ぐに足り、言は以て非を飾るに足る。始めて、象箸を爲る。箕子歎じて曰く、彼、象箸を爲る。必ず盛るに土簋を以てせず、將に玉杯を爲らむとす。玉杯象箸必ず藜藿を羹にし、短褐を衣て、茆茨の下に舍らず。則ち錦衣九重、高臺廣室、之に稱うて、以て求むれば、天下も足らずと。

紂、有蘇氏を伐つ。有蘇、妲己を以て女はす、寵あり。其言、皆從ふ。賦稅を厚くし、以て鹿臺の財を實たし、鉅橋の粟を盈たす。沙丘の苑臺を廣め、酒を以て池となし、肉を懸けて林となし、長夜の飲をなす。百姓怨望し、諸侯畔く者あり。紂、乃ち刑辟を重くす。銅柱を爲り、膏を以て之に塗り、炭火の上に加へ、罪ある者をして

評　紂王暴逆古今稀に見る所人心にも聖人の心にも七竅あり比干の胸を割くに至りては寔に絶言語に絶すべしと言ふべ

炮烙之刑
微子
比干

之に縁らしむ。足、滑にして、跌いて火中に墜つ。妲巳と之を觀て大に樂む。名づけて炮烙の刑といふ。淫虐甚し。庶兄微子、數ば諫むれども、從はず。之を去る。比干諫めて、三日去らず。紂、怒つて曰く、吾聞く、聖人の心には七竅ありと。割いて、其心を觀る。箕子佯狂して奴となる。紂之を囚ふ。殷の大師、其樂器祭器を持して周に奔る。

周侯昌及び九侯、鄂侯、紂の三公たり。紂、九侯を殺す。鄂侯、爭ふ。幷せて之を脯にす。昌、聞いて歎息す。紂、昌を羑里に囚ふ。昌の臣散宜生、美女珍寶を求めて進む。紂、大に悅び、乃ち昌を釋す。昌、退いて德を修む。諸侯多く紂に叛いて之に歸す。昌、

評　紂の亡ぶるや實に玉を焚き衣を自ら焚て死す所謂自業自得なるも殷人の男性的なる所を顯はすものといふべし

麥秀之歌

西紀前一一二〇

卒す。子發立ち、諸侯を率ゐて紂を伐つ。紂、牧野に敗る。寶玉を衣て、自ら焚死す。殷亡ぶ。

箕子、後、周に朝す。故の殷の墟を過ぎ、宮室毀壞して禾黍を生ずるを傷む。哭せむと欲す。不可なり。泣かんと欲す。爲、婦人に近し。乃ち麥秀の歌を作つて曰く、麥秀漸漸兮。禾黍油油兮。彼狡童兮。不二與我好一兮。と。殷の民、之を聞いて皆流涕す。殷、天子たること三十一世、六百二十九年。

周

【周武王】姬姓、名は發、后稷十六世の孫なり。后稷、名は棄。棄

の母を姜嫄といふ。帝嚳の元妃たり。野に出で、巨人の跡を見、心欣然として、之を踐み、棄を生む。以て不祥となし、之を隘巷に棄つ。馬牛避けて踐まず。徙して、山林に置く。適ま林中、人多きに會す。之を氷上に遷す。鳥、之を覆翼す。以て神となし、遂に之を收む。兒たる時、屹として、巨人の志の如し。その游戲するや、種樹を好む。成人に及ぶや、能く地の宜を相る。民に稼穡を敎へ、陶唐虞夏の際に興る。農師となり、邰に封ぜらる。其姓を別にし、后稷と號す。卒す。

子不窋立つ。夏后氏、政衰ふるや、不窋、其官を失ひ、戎狄の間に奔る。不窋卒す。子鞠立つ。鞠卒す。子公劉立つ。復た后稷の

業を修めて、畊種を務む。百姓之に懷く。公劉卒す。子慶節立ち、豳に國す。皇僕、參弗、毀隃、公非、高圉、亞圉、公叔鉏を歷て、古公亶父に至る。獯鬻之を攻む。豳を去り、漆阻を渡り、梁山を踰え、岐山の下に邑して居る。豳人曰く仁人なり失ふべからずと。老を扶げ、幼を携へ、以て從ひ、他の旁國、皆之に歸す。

古公の長子太伯、次は虞仲。その妃太姜、少子季歷を生む。季歷太任を娶り、昌を生む。聖瑞あり。太伯、虞仲、古公が季歷を立て以て昌に傳へむと欲するを知り、乃ち荆蠻に如き、斷髮文身以て季歷に讓る。古公卒し公季立つ。公季卒し昌立つ。西伯と爲る。西伯德を修め、諸侯、之に歸す。虞芮田を爭ひ、決する能はず。乃ち周

太公望

に如く、界に入つて、畊者を見るに、皆畔を遜り、民俗、皆、長に讓る。二人慙ぢて、相謂つて曰く、吾が爭ふ所は、周人の恥づる所なりと。乃ち西伯に見えずして還り、俱に其田を讓つて取らず。漢南西伯に歸する者、四十國。皆以て受命の君なりと爲す。天下を三分して、その二を有つ。

呂尙といふ者あり。東海上の人。窮困して年老い、漁釣して、周に至る。西伯將に獵せむとす。之を卜す。曰く、龍に非ず、彲に非ず、熊に非ず、羆に非ず、虎に非ず、貔に非ず、獲る所は霸王の輔ならむと。果して、呂尙に渭水の陽に遇ふ。與に語て大に悅で曰く、吾が先君太公より曰ふ、當に聖人ありて周に適くべし、周、因つて以て興らむと。子は眞に是れか。吾が太公、子を望むこと久しと。故に之を號して太公望といひ、載せて與に俱に歸り、立てて師となす、これを師尙父といふ。

武王武德

西伯卒して、子發立つ。これを【武王】となす。東、兵を觀して、盟津に至る。白魚、王の舟中に入る。王、俯して取り、以て祭る。すでに渡る、火あり、上より下に復し、王の屋に至り、流れて烏となる。其色赤く、其聲魄。是時、諸侯期せずして會する者八百。皆曰く、紂、伐つべしと。王可かずして、引き還る。紂、悛めず。王乃ち紂を伐ち、西伯の木主を載せて以て行く。

伯夷叔齊

伯夷、叔齊、馬を叩へて諫めて曰く、父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ、孝といふべき

か。臣を以て君を弑す、仁といふべきかと。左右、之を兵せむと欲す。太公曰く、義人なりと。扶けて之を去らしむ。王、すでに殷を滅して、天子となり、古公を追尊して、太王となし、公季を王季となし、西伯を文王となす。天下、周を宗とす。伯夷、叔齊、之を恥ぢて、周の粟を食はず、首陽山に隱れ、歌を作つて曰く、登二彼西山一兮采二其薇一矣。以レ暴易レ暴兮不レ知二其非一矣。神農虞夏忽焉沒兮我安適歸矣。于嗟徂兮命之衰矣。と。遂に餓えて死す。

采薇之歌

武王崩ず。太子誦立つ。之を【成王】となす。成王幼なり。周公、冢宰に位して、政を攝す。管叔、蔡叔、流言して曰く、公、將に孺子に利あらざらむとすと。武庚と亂を作す。武庚は武王立つる所、

周公

評　所謂周公流言飛語之時

紂の子祿父、殷の後たる者なり。周公東征して、武庚、管叔を誅し、蔡叔を放つ。王、長ず。周公政を歸へす。

初め、武王、鎬京を作る。之を宗周といひ、之を西都となす。將に洛邑に營まむとして未だ果さず。王、武王の志の如くせむと欲す。召公、遂に宅を相る。周公、洛に至つて、王城を築き、之を東都となす。洛を天下の中と爲す。四方入貢の道里均しきを以てなり。王、西都に居り、諸侯を東都に朝會す。周公召公、成王を相けて、左右の人となる。陝より以西は、召公これを主り、陝より以東は、周公これを主る。

交趾の南に越裳氏あり、三譯を重ねて來り、白雉を獻じて曰く、

「中國」の起源

吾、命を國の黄耆に受く。天に烈風淫雨なく、海、波を揚げざる三年。意ふに、中國に聖人あるかと。周公、王に歸し、宗廟に薦む。使者、歸路に迷ふ。周公之に賜ふに駢車五乘を以てす、皆、指南の制を爲す。使者、之に載り、扶南林邑の海際より、期年にして、國に至る。故に、指南車、常に先導をなし、遠人を服して、四方を正すを示す。

指南車

刑錯而四十餘年不用

成王崩ず。子【康王釗】立つ。成康の際、天下安寧、刑錯いて、四十餘年用ゐず。康王崩ず。子【昭王瑕】立つ。昭王、南に巡狩して、楚に至る。膠舟を以て、之を載す。溺れて返らず。

造父善く馬を御す

子【穆王滿】立つ。造父といふ者あり、善く御するを以て、王に幸せらる。八駿馬を得て、天下を遊行し、將に、皆、車轍馬跡あらしめむとす。王、西巡す。世に傳ふ、王、この時を以て、西王母に瑤池の上に觴し、樂んで歸るを忘ると、徐の偃王、亂を作す。造父、王に御とし、長驅して、歸つて、亂を救ひ、楚に告げて、徐を伐たしむ。徐敗る。王、將に犬戎を征せむとす。祭公謀父、諫めて曰く、先王、德を輝かして、兵を觀さずと。王、聽かずして、之を征し、四白狼、四白鹿を得て歸る。是より、荒服の者至らず、諸侯睦じからず。崩ず。子【共王緊扈】立つ。崩ず。子【夷王燮】立つ。崩ず。子【懿王囏】立つ。崩ず。弟【孝王辟方】立つ。崩ず。子【夷王燮】立つ。堂を下つて諸侯を見る。楚、始めて、僭して王と稱す。

評　民の口を防ぐは川を防ぐよりも甚だしい、古今言路を塞いで國を喪はざるものなし

夷王崩ず。子【厲王胡】立つ。無道にして、暴虐侈傲なり。衞の巫を得、國人の謗る者を監せしむ。以て告ぐれば、之を殺す。道路、目を以てす。王喜んで曰く、吾、能く謗を弭むと。或ひと曰く、是れ障ぐなり。民の口を防ぐは、川を防ぐよりも甚し。水壅がつて潰ゆれば、人を傷ふこと、必ず多からむと。王聽かず。是に於て、國人相與に畔く。王、彘に出奔す。二相、周召とともに國事を理め、共和といふもの、十四年。而して、王、彘に崩ず。

子【宣王靜】立つ。賢に任じ、能を使ふ。召穆公、方叔、尹吉甫、仲山甫等あり。政を內外に爲し、王化復た行はれ、周室中興す。崩ず。子【幽王宮湦】立つ。はじめ、夏后氏の世、二龍あり、庭に降つて曰く、予は褒の二君なりと。卜して、其漦を藏し、夏殷を歷て、敢て發くなし。周人、之を發く。漦、化して、黿となる、童妾、これに遇うて孕む。女を生む。之を棄つ。宣王の時、童謠あり、曰く緊弧箕服實に周國を亡さむと。適ま、この器を鬻ぐ者あり。宣王、これを執へしむ。その人。逃る。道に於て棄女を見。その夜號を哀んで。之を取り、褒に逸す。幽王の時に至つて、褒人罪あり。この女を王に入る、是を褒姒となす。王、之を嬖す。褒姒、笑ふを好まず。王、その笑はむことを欲す。萬方すれども、笑はず。王、諸侯と約し、寇あれば、烽火を擧げ、その兵を召して、來り援けしむ。乃ち故なくして、火を擧ぐるや、諸侯、悉く至り、而して寇なし。

評　褒姒一笑　周祚傾く

孔子春秋を修む

褒姒、大に笑ふ。王、申后及び太子宜臼を廢し、褒姒を以て后とな
し、その子伯服を太子となす。宜臼、申に走る。王、之を殺すを求
むれども得ず、申を伐つ。申侯、犬戎を召して、王を攻む。王、烽
火を擧げて、兵を徵せども、至らず。犬戎、王を驪山の下に殺す。
諸侯、宜臼を立つ。之を**【平王】**となす。西都の戎に逼るを以て、
徙つて、東都の王城に居る。時に、周室衰微、諸侯强は弱を幷せ、
齊楚秦晉、始めて强大なり。平王の四十九年は、卽ち魯の隱公の元
年なり。其後、孔子春秋を修むる、ここに始まる。
平王崩ず。太子の子**【桓王林】**立つ。崩ず。子**【莊王佗】**立つ。崩ず。
子**【釐王胡齊】**立つ。齊の桓公、始めて霸たり。釐王崩ず。子**【惠王**

莊王人をして鼎の輕重を問はしむ

孔子生る

孔子歿す

閬】立つ。崩ず。子**【襄王鄭】**立つ。晉の文公、始めて霸たり、襄王
崩ず。子**【頃王壬臣】**立つ。崩ず。子**【匡王班】**立つ。崩ず。弟**【定王
瑜】**立つ。楚の莊王、人をして、鼎の輕重を問はしむ。王孫滿、こ
れを卻く。
定王崩ず。子**【簡王夷】**立つ。吳、始めて僭して王と稱す。簡王崩
ず。子**【靈王泄心】**立つ。孔子、其時に生る。靈王崩ず。子**【景王貴】**
立つ。崩ず。子**【悼王猛】**立つ。庶弟子朝、之を弑す。晉人、子朝を
攻めて**【敬王丐】**を立つ。孔子、其時に歿す。敬王崩ず。子**【元王仁】**
立つ。崩ず。弟**【貞定王介】**立つ。崩ず。子**【哀王去疾】**立つ。弟**【思
王叔帶】**襲うて、之を弑して自立す。少弟**【考王嵬】**又攻めて思王を

殺して自立す。崩ず。子【威烈王午】立つ。晉の趙氏、魏氏、韓氏、はじめて侯たり。周は、東遷より以來、ここに及ぶまで、二十世にして愈よ微、諸侯兵を用ゐて、强を爭ひ、號して、戰國となす。

威烈王崩ず。子【安王驕】立つ。齊の田氏、始めて侯たり。安王崩ず。子【烈王喜】立つ。崩ず。弟【顯王扁】立つ。諸侯、皆、僭して王と稱す。顯王崩ず。子【愼靚王定】立つ。崩ず。子【赧王延】立つ。五十九年、諸侯と從を約して、秦を攻む。秦の昭王、周を攻む。赧王、秦に奔り、頓首して、罪を受け、盡く其邑を獻ず。秦、獻を受けて、赧王を周に歸し、以て卒す。周、天子たること、三十七世。はじめ、夏の亡ぶるとき、九鼎殷に遷り、殷亡びて周に遷る。成王、鼎を郟鄏に定め、卜して曰く、世を傳ふる三十、年を歷る七百と。是に至つて、乃ち其歷を過ぐ。凡そ八百六十七年。

西紀前自七〇至二二一

春秋戰國

周の平王以後を春秋の世となす。其列國、周と同姓なる者、魯といひ、衞といひ、晉といひ、鄭といひ、曹といひ、蔡といひ、燕といひ、吳といひ、其周と異姓なる者、齊といひ、宋といひ、陳といひ、楚といひ、秦といふ。是れ、其大なる者。餘の小國、春秋に書する所の杞、許、滕、薛、邾、莒、江、黃の屬の如きは、盡く述ぶ可からず。十二列國の中に於ては、齊の

桓公、宋の襄公、晉の文公、秦の穆公、楚の莊王、五霸の事跡あり。若し、春秋諸國の終始を論ぜば、未だ戰國に及ばずして先づ亡ぶる者あり、既に戰國に及びて後に亡ぶる者あり、各、其概を擧ぐ。周の威烈王以後を戰國の世となす。則ち、秦、楚、燕、齊、趙、魏、韓の七大國のみ。秦、楚、燕は、猶ほ春秋の舊國たり。田齊、趙、魏、韓は、戰國の新國なり。凡そ、春秋戰國の間、周の諸侯に繫ると雖も、而かも國ごとに、政を異にして、實は周に繫らず。盡く載せ難し、周の下方に附見す。其時、各、先後あり。觀る者、之を詳にせよ。

【吳】姬姓、太伯、仲雍の封ぜられし所なり。十九世、壽夢に至つて、始めて王と稱す。壽夢の四子、幼を季札といふ。札、賢なり。三子をして、相繼いで立たしめ、以て札に及ばむと欲す。札、義として、可かず。延陵に封ぜられ、號して、延陵の季子といふ。上國に聘して、徐を過ぐ。徐君、其寶劍を愛す。季子、心に之を知る。使して、還るとき、徐君すでに歿す、遂に劍を解いて、其墓に懸けて去る。

延陵の季子

壽夢の後、四君にして、闔廬に至る。伍員を擧げて、國事を謀らしむ。員、字は子胥、楚人、伍奢の子なり。奢、誅せらる。吳に走り、吳兵を以て郢に入る。吳、越を伐つ。闔廬、傷いて死す。子夫差立つ。子胥、復た之に事ふ。夫差、復讎を志し、朝夕、薪中に臥

伍子胥

夫差臥薪志復讎

勾踐嘗膽雪會稽恥

吾が目を抉つて東門に懸けよ

し、出入に人をして呼ばしめて曰く、夫差、而、越人の而が父を殺せしを忘れたるかと。周の敬王二十六年、夫差、越を夫椒に敗る。越王勾踐、餘兵を以て會稽山に棲み、請ふらく、臣となり、妻は妾とならむと。子胥言ふ、不可なりと。太宰伯嚭、越の賂を受け、夫差に說いて越を赦す。勾踐國に反るや、膽を坐臥に懸け、卽ち膽を仰いで、之を嘗めて曰く、女、會稽の恥を忘れたるかと。國政を擧げて、大夫種に屬し、而して、范蠡と兵を治め、吳を謀るを事とす。太宰嚭、子胥を譖し、謀の用ゐられざるを恥ぢて、怨望す。夫差、乃ち子胥に屬鏤の劍を賜ふ。子胥、其家人に告げて曰く、必ず吾が墓に槙を樹えよ、槙は材とすべきなり。吾が目を抉つて、東門に懸けよ、以て越兵の吳を滅すを見むと。乃ち自刎す。夫差、其屍を取り、盛るに鴟夷を以てし、之を江に投ず。吳人、之を憐み、祠を江上に立て、命づけて胥山といふ。

註

李白の蘇臺覽古の詩に曰く——舊苑荒臺楊柳新、菱花清唱不勝春、唯今惟有西江月、曾照吳王宮裏人

評

長頸烏喙に患難を共にすべきも、樂を共にすべからざる者古今其人に乏しからず豈獨り越

越、十年生聚し、十年敎訓す。周の元王四年、越、吳を伐つ。吳三たび戰つて三たび北ぐ。夫差、姑蘇に上り、亦た成を越に請ふ。范蠡可かず。夫差曰く、吾、以て子胥を見るなからむと。幎冒を爲つて、乃ち死す。

越、すでに吳を滅すや、范蠡、之を去る。大夫種に書を遺つて曰く、越王、人と爲り、長頸烏喙ともに患難を共にすべきも、ともに安樂を共にすべからず。子、何ぞ去らざると。種、疾と稱して朝

王のみならんや吳越の興亡大に鑑とすべきなり

評　范蠡は天下の奇才なりとて越に在りては軍師となりて吳を滅し齊に在りては宰相となりて位を極め人臣を而かも淡然として兩ながら之を棄てゝ陶朱公となりて貲巨萬を累ぬ其秘訣は求めざるに在り

せず。或ひと種を讒し、まさに亂を作さむとすといふ。劍を賜うて死す。范蠡、其輕寶珠玉を裝ひ、私從と舟に江湖に乘じ、海に浮びて、齊に出で、姓名を變じて鴟夷子皮といひ、父子產を治めて、數千萬に至る。齊人、其賢を聞き、以て相となす。蠡、喟然として歎じて曰く、家に居ては千金を致し、官に居ては卿相を致す、之布衣の極なり、久しく尊名を受くるは不祥なりと。乃ち相印を歸し、悉く其財を散じ、重寶を懷にして間行し、陶に止まり、自ら陶朱公といひ、貲鉅萬を累ぬ。魯人猗頓、往いて術を問ふ。蠡曰く、五牸を畜へと、乃ち大に牛羊を猗氏に畜ふや、十年の間、貲、王公に擬す。故に天下富を言ふ者、陶朱、猗頓を稱す。

陶朱猗頓

り當世の求めて求めて遂に得る能はざる者を慚死せしむるに足る

宋襄の仁

【蔡】姬姓、蔡仲の封ぜられし所なり。周公、蔡叔を郭鄰に放つや、其子胡、德に率ひ、行を改めて、復た蔡に封ぜらる。後世、春秋の末に至り、楚の惠王の爲に滅ぼさる。

【曹】姬姓、武王の弟曹叔振鐸の封ぜられし所なり。其後世、春秋中に至り、宋の爲に滅ぼさる。

【宋】子姓、商紂の庶兄微子啓の封ぜられし所なり。後世、春秋に至り、襄公茲父といふ者あり。諸侯に霸たらむと欲し、楚と戰ふ。公子目夷、其未だ陣せざるに及んで之を擊たむと請ふ。公曰く、君子は、人を阨に困めずと。遂に楚に敗らる。世、笑うて、以て宋襄の仁となす。

景公名言

其後、景公といふ者あり、熒惑かつて其時を以て心を守る。心は宋の分野なり。公、之を憂ふ。司星子韋曰く、相に移すべし。公曰く、相は吾が肱股なり。曰く、民に移すべし。公曰く、君は民を待つ。曰く、歳に移すべし。公曰く、歳饑うれば、吾、誰が爲にか君たらむ。子韋曰く、天は高くして卑きに聽く。君、人に君たるの言、三あり。宜しく動くこと有るべしと。之を候するに、果して、一度を徙る。

桀宋

數世を歴て、康王偃に至る。雀あり、鸇を生む。之を占すれば、曰く、必ず天下に霸たらむと。偃喜び、齊、楚、魏を敗り、ともに敵國となる。偃、淫虐、天下之を號して桀宋といふ。周の愼靚王の時、齊の湣王、楚魏と與に宋を伐ち、之を滅して、其地を分つ。

評　王過あれば則ち伯禽を撻つ

【魯】姬姓、周公の子、伯禽の封ぜられし所なり。周公、成王を誨ふ。王、過あれば則ち、伯禽を撻つ。伯禽、封に就く。公之を戒めて曰く、我は文王の子、武王の弟、今王の叔父なり。然れども、我一沐に三たび髪を握り、一飯に三たび哺を吐き、起つて、以て士を待ち、猶ほ天下の賢人を失はむことを恐る。子、魯に之かば、愼んで、國を以て人に驕ることなかれと。太公齊に封ぜられ、五月にして、政を報ず。周公曰く、何ぞ疾きや。曰く、吾、其君臣の禮を簡にし、其俗に從ふと。伯禽、魯に至り、三年にして政を報ず。周公曰く、何ぞ遲きや。曰く、其俗を變じ、其禮を革め、喪は

握髪吐哺

三年にして後に之を除く。周公曰く、後世、それ北面して齊に事へむか。夫れ政は簡ならず易ならざれば、民近づく能はず、平易にして民を近づくれば、民必ず之に歸すと。周公、太公に問ふ、何を以て齊を治むる。曰く、賢を尊んで功を尚ぶ。周公曰く、後世必ず簒弑の臣あらむと。太公、周公に問ふ、何を以て魯を治むる。曰く、賢を尊んで親を親をす。太公曰く、後寖く弱からむと。

伯禽より十三世にして、隱公に至る。春秋の始となす。隱公の弟を桓公といふ。桓公の子は莊公。莊公、庶弟三人あり。曰く慶父、其後を孟孫氏となす。曰く叔牙、其後を叔孫氏となす。曰く季友、其後を季孫氏となす。之を三桓となす。世、國命を執る。子班、閔

評　太公望と周公との政治問答興味津々たり

孔子を以て中都の宰となす

公、僖公、文公、宣公、成公、襄公を經て、昭公に至り、季氏を伐つ。三家共にこれを伐つ。公、乾侯に奔り、以て卒す。

弟定公立つ。孔子を以て中都の宰となす。一年にして、四方、皆、之に則る。中都より司空となり、進んで、大司寇となり、定公を相けて、齊侯に夾谷に會す。孔子曰く、文事ある者は、必ず武備あり、請ふ左右の司馬を具へて、以て從はむと。すでに會するや、齊の有司請うて、四方の樂を奏す。是に於て、旗旄劍戟、鼓譟して至る。孔子、趨つて進んで曰く、吾が兩君、好をなす、夷狄の樂、何すれぞ此に於てすると。齊の景公、心に怍ぢ、之を麾く。齊の有司、請うて、宮中の樂を奏す。優倡侏儒戲れて前む。孔子趨つて

進んで曰く、匹夫にして諸侯を熒惑する者は、罪、當に誅すべし。請ふ、有司に命じて、法を加へむと。首足處を異にす。景公懼る。歸つて、其臣に語つて曰く、魯は君子の道を以て其君を輔く、しかるに、子は獨り夷狄の道を以て寡人に敎ふと。是に於て、齊人、乃ち侵せし所の魯の鄆、汶陽、龜陰の地を歸へし、以て魯に謝す。孔子、定公に言ひ、將に三都を墮ち、以て公室を强くせむとす。叔孫氏、先づ郈を墮ち、季氏、費を墮つ、孟氏の臣、成を墮つを肯んぜず。之を圍む。克たず。孔子、大司寇より、相事を攝行し、七日にして、政を亂せし大夫少正卯を誅す。居ること三月、魯、大に治まる、齊人、之を聞いて懼れ、乃ち女樂を魯に歸る。季桓子、之を受

けて政を聽かず。郊して、又膰俎を大夫に致さず。孔子、遂に魯を去る。

定公卒す。子哀公立つ。越を以て、三桓を伐たむと欲す。克たず。悼公、元公を歷て、繆公に至る。子思を尊ぶを知れども、用ゆる能はず。共公、康公を歷て、平公に至る。かつて、孟子を見むと欲せしが果さず。文公を歷て、頃公に至り、楚の考烈王の爲に滅ぼさる。魯は、周公より、頃公に至るまで、凡そ三十四世。

孔子、名は丘、字は仲尼、其先は、宋人なり。正考父といふ者あり。宋に佐たり。三たび命ぜられて、ます〳〵恭し。其鼎銘に云ふ、一命而僂。再命而傴。三命而俯。循ㇾ墻而走。亦莫ニ余敢侮一。

饘於是。粥於是。以餬予口。孔氏、宋に滅び、其後魯に適く。叔梁紇といふ者あり。顔氏の女と尼山に禱つて、孔子を生む。兒たるとき嬉戯するに、常に俎豆を陳ね、禮容を設く。長じて、季氏の吏となり、料量平かなり。嘗て、司職の吏となる。畜、蕃息す。周に適いて禮を老子に問ふ。反つて、弟子、稍益進む。齊に適く。齊の景公、將に待つに季孟の間を以てせむとす。孔子、魯に反る。定公、之を用ゐて終へず。衞に適く。將に陳に適かむとす。匡を過ぐ。匡人、かつて陽虎に暴せらる。孔子の貌、陽虎に類す。之を止む。すでに免れて衞に反る。靈公の爲す所を醜として、之を去り、曹を過ぎ、宋に適き、弟子と禮を大樹の下に習はす。桓魋、其樹を伐り拔く。鄭に適く。鄭人曰く、東門に人あり、其顙は堯に似、其項は皐陶に類し、其眉は子産に類す。要より以下、禹に及ばざること三寸、纍纍然として喪家の狗の若しと。陳に適き、又衞に適き、將に、西、趙簡子を見むとす。河に至る。竇鳴、犢舜華が殺されて死せしを聞き、河に臨んで、歎じて曰く、美なるかな水、洋洋乎たり、丘の渡らざる、これ命なりと。衞に反り、陳に適き、蔡に適き、薛に如き、蔡に反る。楚、人をして之を聘せしむ。陳蔡の大夫、謀つて曰く、孔子、楚に用ゐらるれば、陳蔡危しと。相ともに徒を發して、之を野に圍む。孔子曰く、詩に云ふ、兕に匪ず、虎に匪ず、かの曠野に率ふと。吾が道、非なる邪。吾、何すれぞ、是に

於てする。子貢曰く、夫子の道、至大、天下能く容るる莫し。顏回曰く、容れられざるも、何ぞ病まむ、然る後に、君子を見ると。楚の昭王、師を興して、之を迎へ、乃ち楚に至るを得たり。將に封ずるに、書社の地七百里を以てせむとす。令尹子西、可かず。孔子、衞に反る。季康子、迎へて、魯に反る。哀公、政を問ひしが、終に用ゆる能はず。乃ち書を序し、上は唐虞より下は秦繆に至る。古詩三千を刪つて、三百五篇となし、皆、之を絃歌す。禮樂、此れより述ぶべし。晩にして易を喜び、彖、象、繫辭、說卦、文言を序す。易を讀むや、韋編三たび絕つ。魯の史記に因つて、春秋を作る。隱より哀に至るまで、十二公。筆を獲麟に絕つ。筆すべきは則ち筆

韋編三たび絕つ

子思
孟子
孟母三遷之教

老子傳

良賈深藏若虛
君子有盛德容貌若愚

評

し、削るべきは則ち削る。子夏の徒、一辭を贊する能はず。弟子三千人。身、六藝に通ずる者、七十有二人、年七十三にして卒す。子鯉、字は伯魚、早く死す。孫伋、字は子思、中庸を作る。孟子は、その門人なり。名は軻、魯の孟孫の後、鄒に生まる。幼にして、慈母三遷の敎を被り、長じて、業を子思の門に受く。道、すでに通ずるや、齊、梁に遊びしが、用ひられず。退いて、萬章の徒と難疑答問して、七篇を作る。

老子は、楚の苦縣の人なり。李姓、名は耳、字は伯陽、又曰く字は聃。周の守藏室の吏たり。孔子問ふ。老子、之に告げて曰く、良賈は深く藏して虛しきが若く、君子は盛德あつて容貌愚なるが若

しと。孔子、去つて、弟子に謂つて曰く、鳥は吾その能く飛ぶを知る。魚は吾その能く游ぐを知る。獸は吾その能く走るを知る。走るものは、以て網を爲すべく、游ぐものは、以て綸を爲すべく、飛ぶものは、以て矰を爲すべし。龍に至つては、吾知る能はず、その風雲に乘じて、天に上ればなり。今、老子を見るに、其れ猶ほ龍の如きかと。老子、周の衰へたるを見、去て、關に至る。關令、尹喜曰く、子、將に隱れむとす。我が爲に書を著せと。乃ち道德五千餘言を著して去る。その終る所を知る莫し。その後、鄭人列禦寇、蒙人莊周あり、亦た老子の學を爲す。莊周、書を著し、孔子を侮つて、諸子を誚る。

評　子路の面目躍如たり

聖人の人を用ゆる猶匠の木を用ゆるが如し

【衛】姬姓、武王の母弟康叔封の封ぜられし所なり。後世、春秋に至り、靈公の夫人南子の亂あり。子蒯聵、南子を殺さむと欲して果さず、出奔す。公卒し、蒯聵の子輒を立つ。蒯聵入る。輒、これを拒ぐ。子路其難に與かる。太子の臣、戈を以て子路を擊ち、纓を斷つ。子路曰く、君子は死するも、冠を免がずと。纓を結んで死す。衞人、子路を醢にす。孔子、之を聞いて命じて、醢を覆さしむ。

戰國の時、子思、衞に居る。言ふ。苟變、將とすべしと。衞君曰く、變、かつて吏となり、民に賦して、人の二雞子を食ふ、故に用ゐずと。子思曰く、聖人の人を用ゆる、猶ほ匠の木を用ゆるが如く、其長とする所を取り、其短とする所を棄つ。故に杞梓連抱にし

以二卵棄干城之將

評　阿諛諂佞國を亡ぼすもの其例少からず

烏の雌雄

て、數尺の朽あるも、良工は棄てず。今、君、戰國の世に處つて、而かも、二卵を以て、干城の將を棄つ、これ鄰國に聞こえしむべからざるなりと。衞侯の言、計、是に非ずして、群臣和する者、一口に出づるが如し。子思曰く、君の國事、將に日に非ならむとす。君、言を出して自ら以て是となし、而かも、卿大夫、敢て其非を矯むるなし。卿大夫、言を出して、自ら以て是となし、而かも、士庶人、敢て其非を矯むるなし。詩に曰ふ、ともに予を聖なりといふも、誰か烏の雌雄を知らむやと。

周の諸侯、唯、衞のみ最も後れて亡ぶ。秦、天下を併せて帝となるに至り、二世始めて君角を廢して、庶人となす。

子產

【鄭】姬姓、周の宣王の庶弟桓公友の封ぜられし所なり。桓公の子武公、其子莊公と、並に周の司徒たり。數世、聲公に至り、子產を相とす。子產は、公族、國氏、名は僑。孔子、鄭を過ぐるや、子產と兄弟の如しといふ。穆襄より以來、鄭、年として、晉楚の兵を被らざるなし。子產、之を受くるに、禮を以てして、自ら固うし、晉楚の暴と雖も、加ふる能はず。鄭は、周の威烈王の時に至つて、君乙、韓の哀侯に滅ぼされ、韓、徙つて之に都す。

【晉】姬姓、成王の弟唐叔虞の封ぜられし所なり。成王幼なるとき、叔虞と戲れ、桐葉を削つて圭となして曰く、之を以て若を封ぜむ、と。史佚、日を擇ばむを請ふ。王曰く、吾、之と戲るるのみ。佚曰

天子無戲言

文公

く、天子に戲言なしと。遂に唐に封ず。

後世、文公に至つて、諸侯に霸たり。文公、名は重耳、獻公の次子なり。獻公、驪姬を嬖し、太子申生を殺して、重耳を蒲に伐つ。重耳、出奔し、十九年にして後に、國に反る。かつて、曹に餒ゆ。介子推、股を割いて以て之に食はしむ。歸るに及びて、從亡の者、狐偃、趙衰、顛頡、魏犨を賞し、子推に及ばず。子推の從者、書を宮門に懸けて曰く、有レ龍矯矯。頃失二其所一。五蛇從レ之。周二流天下一。龍饑乏レ食。一蛇割レ股。龍返二於淵一。安二其壤土一。四蛇入レ穴。皆有二處處一。一蛇無レ穴。號二于中野一。と。公曰く、噫、寡人の過なりと。人をして、之を求めしむ。得ず。綿上の山中に隱る。其山を

焚く。子推死す。後人、之が爲に寒食す。文公、綿上の田を環らして、之を封じ、號して介山といふ。

文公卒す。其後、遂に、世、霸たり。襄公、靈公、成公、景公、厲公を歷へ、悼公に至つて、霸業復た盛なり。又平公、昭公、頃公を歷、公室益々弱し。而して、六卿、范氏、知氏、中行氏、趙氏、魏氏、韓氏、皆、大なり。定公を歷て、出公に至り、知氏、趙、魏、韓氏と與に、范、中行氏を分つ。公怒る。四卿、反つて、公を攻む。公、出奔して死す。哀公立つ。韓、趙、魏氏、又知氏を滅じて、之を分つ。出公立つ。晉、ひとり、絳、曲沃を有するのみ。餘は、皆、韓、趙、魏氏に入る。號して、三晉となす。烈公立つ。三卿、

周の威烈王の命を以て侯となる。又孝公を歴て、靜公に至り、魏の武侯、韓の哀侯、趙の敬侯、共に靜公を廢し、家人となして、その地を分ち、晉絶えて、祀らず。

【陳】嬀姓、虞舜の後、胡公滿の封ぜられし所なり。周の武王、求めて、之を封ず。後世、春秋に至り、公子完といふ者あり、出奔して、齊に仕ふ。陳、後に楚の惠王に滅ぼさる。而して、完の後、遂に齊に大なり、田氏となす。

【齊】姜姓、太公望呂尚の封ぜられし所なり。後世、桓公に至り、諸侯に霸たり、五霸、桓公を始となす。名は小白。兄襄公、無道なり。群弟、禍の及ばむことを恐る。子糾は魯に奔り、管仲これに傅たり。小白は莒に奔り、鮑叔、之に傅たり。襄公、弟、無知に弑せられ、無知も亦た人に殺さる。齊人、小白を莒より召ぶ。而して、魯も亦た兵を發して糾を送る。管仲、かつて、莒の道を遮り、小白を射て帶鉤に中つ。小白先づ齊に至つて立つ。鮑叔牙、管仲を薦めて政を爲さしむるや、公、怨を置いて、之を用ゆ。

管仲鮑叔

仲、字は夷吾。かつて、鮑叔と賈し、利を分つに多く自ら與ふ。鮑叔、以て貪れりとなさず、仲の貧なるを知ればなり。嘗て、事を謀つて窮困す。鮑叔、以て愚となさず、時に利不利あるを知ればなり。嘗て、三たび戰つて三たび走る。鮑叔、以て怯となさず、仲に老母あるを知ればなり。仲曰く、我を生む者は父母なり、我を知る

註　管仲桓公の問に答ふるに適才を以てせず。唯不適才を排するに止まる。惜しい哉

者は鮑子なりと。桓公、諸侯を九合し、天下を一匡す、皆、仲の謀なり。一にも則ち仲父、一にも則ち仲父といふ。仲、病む。桓公問ふ。群臣誰か相とすべき。易牙は如何。仲曰く、子を殺して以て君に食はしむ、人情に非ず、近づくべからず。開方は如何。曰く、親に倍いて以て君に適ふ、人情に非ず、近づくべからずと。蓋し、開方は、衞の公子にして來奔せる者なり。豎刁は如何。曰く、自宮して以て君に適ふ、人情に非ず、近づくべからずと。仲死す。公、仲の言を用ゐず、卒に之を近づく。三子權を專らにす。公、內寵、夫人の如きもの六。皆子あり。公薨ず。五公子立つを爭ひ、相攻む。公の尸、床に在り。殯斂するなきもの六十七日。尸蟲、戶よ

註　晏子の御者は所謂虎の威を借る狐なり世間其類例に乏しからず

註　豆とは祭器なり

り出づ。

桓公より八世、景公に至る。晏子といふ者あり、之に事ふ。名は嬰、字は平仲。節儉力行を以て、齊に重んぜらる。一狐裘三十年、豚肩、豆を掩はず。齊國の士、待つて以て火を擧ぐる者、七十餘家。晏子出づ。其御の妻、門間より窺ふ。其夫、大蓋を擁し、駟馬に策ち、意氣揚揚として、自得せり。既にして歸るや、妻去らむことを請ふ。曰く、晏子は、身、齊國に相として、名、諸侯に顯はる。其志を觀るに、嘗に以て自ら下るあり。子は人の僕御となつて、自ら以て足れりとなす。妾、是を以て去るを求むるなりと。御者、乃ち自ら抑損す。晏子、怪んで之を問ふ。實を以て對ふ。薦めて、大

夫となす。公、晏子をして、晉に之かしむ。叔向と私語す、以爲へらく、齊の政は、必ず陳氏に歸せむと。其言の如し。

景公の後五世、康公に至り、田和、周の安王の命を受けて侯となり、康公を海濱に遷し、以て死せしむ。姜氏、遂に絶えて、祀らず。

評 職權を濫用し私惠を以て徒黨を結ぶ姦の常套手段なり

【田氏齊】もと嬀姓、陳の厲公佗の子完の後なり。完、齊に奔つて、陳氏となり、後、又、陳を以て田氏となす。完、齊の桓公に事へて、工正となる。卒す。敬仲と謚す。五世、釐子乞に至り、齊の景公に事へて、大夫となる。其賦稅を民より收むるに小斗を以て之を受け、其粟を民に予ふるには、大斗を以てし、私惠を民に行ふ。而かも、公、禁せず。是に由て、齊の衆を得たり。乞、政を專らにす。

註 甌窶は畑なり、汙邪は田なり

威王因齊

淳于髡

卒す。子成子恆、簡公を弑して、平公を立つ。封邑、公の食む所よりも大なり。恆卒す。襄子盤立つ。韓、趙、魏と使を通ず。蓋し、三家は且に晉を有せむとして、田氏は齊を有せむとすればなり。莊子白を歷て、太公和に至り、遂に周の安王の命を以て侯となる。卒す。子桓公午立つ。卒す。子威王因齊立つ。始め、治まらず、諸侯皆來り伐つ。八年、楚、大に兵を發して、齊に加ふ。齊、淳于髡をして、救を趙に請はしむ。金百斤、車馬十駟を齎らさしむ。髡、天を仰いで、大に笑ふ。王曰く、先生、之を少しとするか。髡曰く、臣、道傍に田を穰る者を見るに、一豚蹄と酒一壺とを取り、祝して曰く、甌窶滿レ篝。汙邪滿レ車。五穀蕃熟。穰穰滿レ家。と。臣、其

持する所の狹くして欲する所の奢れるを見、故に之を笑ふと。王、乃ち黃金千鎰、白璧十雙、車馬百駟を益す。髡、乃ち行く。時に、齊國、幾んど振はず。王、乃ち卽墨の大夫を召して、之に語つて曰く、子の卽墨に居るや、毀言日に至る。然れども、吾、人をして卽墨を視せしむるに、田野辟け、人民給し、官無事にして、東方寧し。是れ、子が吾が左右に事へて以て助を求めざればなりと。之を萬家に封ず。阿の大夫を召して、之に語つて曰く、子の阿を守りしより、譽言日に至る。然れども、吾、人をして阿を視せしむるに、田野辟けず、人民貧餒。趙の甄を攻むるや、子救はず。衞の薛陵を取るや、子知らず。是れ子が幣を厚うし、吾が左右に事へて以て譽を求むればなりと。この日、阿の大夫と嘗て譽めし者とを烹る。群臣聳懼して、敢て飾詐するなく、齊、大に治まり、諸侯敢て復た兵を致さず。

評　威王霸王の風采あり

威王、魏の惠王と郊に會田す。惠王曰く、齊に寶ありや。王曰く、有るなし。惠王曰く、寡人の國、小なりと雖も。猶ほ徑寸の珠、車の前後各十二乘を照らすもの十枚あり。威王曰く、寡人の寶は王と異る。吾が臣に檀子といふ者あり、南城を守らしむ、楚、敢て寇を泗上に爲さず、十二諸侯、皆來朝す。盼子といふ者あり、高唐を守らしむ、趙人敢て東して河に漁せず。黔夫といふ者あり、徐州を守らしむ、則ち燕人北門に祭り、趙人西門に祭る。種首といふ者あり、

盜賊に備へしむ、道に遺ちたるを拾はず。この四臣は、將に千里を照らさむとす、豈に特だ十二乘のみならむやと。惠王、慚づる色あり。

威王卒す。子宣王立つ。文學游說の士を喜び、騶衍、淳于髡、田駢、愼到の徒、七十六人、皆上大夫たり。是を以て、齊の稷下學士の盛、且に數百千人ならむとす。然り而して、孟子至れども、而かも用ゆる能はず。

魏、韓を伐つや、韓、救を齊に請ふ。齊、田忌をして、將として、以て韓を救はしむ。魏の將龐涓、嘗て、孫臏と與に兵法を學ぶ。涓、魏の將軍となり、自ら所能の及ばざるを以て、法を以て、其兩足を

孫臏と龐涓

斷つて、之に黥す。齊の使、魏に至り、竊に載せて以て歸る。是に至つて、臏、齊の軍帥となり、直に魏都に赴く。涓、韓を去つて歸る。臏、齊軍の魏地に入る者をして、十萬の竈を爲らしめ、明日は五萬の竈を爲り、又明日は二萬の竈を爲る。涓、大に喜んで曰く、我、固より齊軍の怯なるを知る。吾が地に入つて三日、士卒亡る者、過半なりと。乃ち日を倍し、行を幷せて、之を逐ふ。臏、其行を度るに、暮に當に馬陵に至るべし。道陿くして旁に阻多く、兵を伏すべし。乃ち大樹を斫り、白うして書して曰く、龐涓、此樹下に死せむと。齊師の善く射る者をして、萬弩道を夾んで伏せしめ、期す、暮に火の擧がるを見て發せよと。涓、果して、夜、斫りたる木の下

評 涓の豎子をして名を成さしむる所以野郎自大敵を侮るに在り

孟嘗君好客

に至り、白書を見て、火を以て之を燭すや、萬弩ともに發す。魏師大に亂れて相失す。涓自刎して曰く、遂に豎子の名を成すと。齊、大に魏師を破り、太子申を虜にす。

宣王卒して湣王立つ。靖郭君田嬰は、宣王の庶弟なり、薛に封せらる。子あり、文といふ。食客數千人、名聲諸侯に聞こえ、號して、孟嘗君といふ。秦の昭王、其賢を聞き、乃ち先づ質を齊に納れて、以て見るを求む。至れば則ち止め囚へて之を殺さむとす。孟嘗君人をして、昭王の幸姫に抵つて解かむことを求めしむ。姫曰く、願はくは、君の狐白裘を得むと。蓋し、孟嘗君、嘗て以て昭王に獻じ、他裘なし。客に能く狗盗を爲す者あり、秦の藏中に入り、裘を取り

狗盗鷄鳴

註 湣王驕る乃ち驕る者久しからず

以て姫に獻ず。姫、爲に言うて、釋さるるを得たり。卽ち馳せ去り姓名を變じ、夜半、函谷關に至る。關法、鷄鳴いて方に客を出す。秦王の後に悔いて之を追はむを恐る。客に能く鷄鳴を爲す者あり、鷄、盡く鳴く、遂に傳を發す。食頃にして、追ふ者、果して至る。及ばず。孟嘗君、歸つて、秦を怨み、韓魏と之を伐つて函谷關に入る。秦、城を割いて和す。孟嘗君、齊に相たり。或ひと之を王に毀る。乃ち出奔す。

湣王、宋を滅して驕る。燕の昭王、齊、嘗て燕を破りし故を以て、諸侯と謀を合して齊を攻む。燕軍、臨淄に入る。湣王、莒に走る。楚將淖齒、齊を救ひ、反つて湣王を殺して、燕と共に齊の侵

地を分つ。王孫賈、湣王に莒に從ひ、而かも王の處を失す。其母曰く、汝朝に出でて晩に來れば、吾は門に倚つて望み、汝暮に出でて還らざれば、吾は閭に倚つて望む。汝、今、王に事へ、王、走つて、汝、處を知らず。汝、尙ほ何ぞ歸ると、賈、乃ち淖齒を攻めて、之を殺し、湣王の子法章を求めて之を立て、莒を保つて、以て燕に抗す。時に、齊城、惟だ莒と卽墨とのみ下らず。卽墨の人、田單を推して、將軍となす。身、版鍤を操つて、士卒と功を分ち、妻妾は行伍に編す。城中を收めて、牛千餘を得たり。絳繒衣を爲り、五彩の龍文を畫き、兵刃を其角に束ね、脂を灌ぎ、葦を尾に束ねて其端を燒き、城に數千の穴を鑿ち、夜、牛を縱ち、壯士其後に隨

田單火牛の計

ふ。牛、尾熱し、怒つて燕軍に奔り、觸るる所、盡く死傷す。而して、城中鼓譟して、之に從ひ、聲、天地に振ふ。燕軍敗走し、七十餘城、皆復た齊となる。襄王を莒より迎へ、單を封じて、安平君となす。單、狄を攻む。三月克たず。魯仲連曰く、將軍、卽墨に在るや、曰く、往くべきなし、宗廟亡びぬと。將軍、死の心あつて、士卒、生の氣なく、泣を揮ひ、臂を奮つて、戰を欲せざるなし。今、將軍、東に夜邑の奉あり、西に淄上の娛あり。黃金帶に橫はつて、淄澠の間に騁す。生の樂あつて、死の心なし。故に勝たざるなりと。單、明日、氣を厲まし、城を巡つて矢石の所に立ち、枹を援つて之を鼓す。狄人、乃ち下る。

評　大事を成す死を覺悟するに在り

註　淄と澠とは共に川の名

馮驩

襄王、既に立つ。而して、孟嘗君、中立して諸侯となり、屬する所なし。王、之を畏れ、與に連和す。初め、馮驩、孟嘗君の客を好むを聞いて、來り見え、傳舍へ置かるること十日。劍を彈じて歌うて曰く、長鋏歸らむか、食に魚なしと。之を幸舍に遷す、食に魚あり。又歌うて曰く、長鋏歸らむか、出づるに輿なしと。之を代舍に遷す、出づるに輿あり。又歌うて曰く、長鋏歸らむか、以て家を爲すなしと。孟嘗君、悅ばず。時に邑入、以て客に奉ずるに足らず、人をして、錢を薛に出さしむ。貸者多く息を與ふる能はず。孟嘗君、乃ち驩を進めて、之を責めむことを請ふ。驩往き、與ふる能はざる者は、其券を取つて之を燒く。孟嘗君怒る。驩曰く、薛民をして、君に親ましむと。孟嘗君、竟に薛公となり、薛に終る。

評　說客策士の無節操古今軌を一にす

襄王卒す。子建立つ。母、君王后、賢なり。秦に事へて謹み、諸侯と信あり。君王后卒す。齊客、多く秦の命を受けて、反間し、王に勸めて秦に朝せしめ、攻戰の備を修めず、五國を助けて秦を攻めず。秦王政、既に五國を滅し、兵、臨淄に入る。王建、遂に降る。共に遷して、之を松柏の間に處いて死せしめ、齊を以て郡となす。齊人、是を歌うて曰く。松邪柏邪。住二建共一者客邪。

【趙】の先は、本秦と同姓、蜚廉を祖とす。子季勝あり。其後、造父といふ者あり、周の穆王に事へ、功を以て、趙城に封ぜらる。是に由つて、趙氏となる。春秋の時、趙夙といふ者あり、晉に事ふ。

冬日可愛夏日可畏

評　程嬰と杵臼、是れ義士の標本

夙、成子衰を生み、衰、宣子盾を生む。人曰く、趙衰は冬日のごとしと。趙盾は夏日の日なり。冬日は愛すべし。夏日は畏るべしと。盾、朔を生む。大夫屠岸賈、朔の族を滅す。朔、遺腹の子武あり。賈、之を索むれども得ず、朔の客、程嬰、公孫杵臼、相與に謀つて曰く孤を立つると死すると、孰れか難き。嬰曰く、死は易く、孤を立つるは難きのみ。杵臼曰く、子は其難きを爲せと。杵臼、它兒を取つて、山中に匿る。嬰出で、謬つて曰く、我に千金を與へば、吾、趙氏の孤の處を告げむと。賈喜び、乃ち人をして嬰に隨はしめて、杵臼及び孤を殺す。而して、趙氏の眞の孤在り。嬰、後に武と與に賈を滅し、竟に武を立てて自殺し、以て下宣孟及び杵臼に報じたり。

評　千羊之皮不如一狐之腋

武卒す。文子と號す。文子、景叔を生み、景叔、簡子鞅を生む。簡子、臣あり。周舍といふ。死す。簡子、朝を聽くごとに、悅ばずして曰く、千羊の皮は一狐の腋に如かず。諸大夫の朝する、徒に唯唯を聞いて、周舍の鄂鄂を聞かざるなりと。

簡子の長子を伯魯といひ、幼を無恤といふ。訓戒の辭を三簡に書し、以て二子に授けて曰く、謹んで之を識るせと。三年にして、之を問ふ。伯魯は其辭を擧ぐる能はず、其辭を求むれば、既に之を失ふ。無恤は、其辭を誦して、甚だ習ひ、其簡を求むれば、之を懷中より出して之を奏す。是に於て、無恤を立てて後となす。簡子、尹鐸をして、晉陽を爲めしむ。請うて曰く、以て繭絲を爲さむか、以

て保障を爲さむか。簡子曰く、保障なるかなと。尹鐸、其戶數を損す。簡子、無恤に謂つて曰く、晉國、難あらば、必ず晉陽を以て歸となせと。

簡子卒す。無恤立つ。之を襄子となす。智伯、地を韓魏に求む。皆、之を與ふ。趙に求む。與へず。韓魏の甲を率ゐ、以て趙を攻む。襄子出でて晉陽に走る。三家圍んで之に灌ぐ。城浸さざる三板、沈竈、盡を產すれども民に叛意なし。襄子、陰に韓と約し、共に智伯を敗り、智氏を滅して其地を分つ。

襄子、智伯の頭に漆し以て飲器となす。智伯の臣豫讓、之が爲に仇を報いむと欲す。乃ち佯つて刑人となり、匕首を挾んで、襄子の宮中に入つて圊を塗る。襄子、圊に如く。心動く。之を索めて、讓を獲たり。曰く、子、嘗て范、中行氏に事へざる乎。智伯、之を滅す。子、爲に讐を報いず、反つて、質を智伯に委す。智伯死す。子、獨り何すれぞ仇を報ゆるの深きや。曰く、范、中行氏は、衆人を以て我を遇す。我、故に衆人を以て之に報ず。智伯は、國士を以て我を遇す。我、故に國士を以て之に報ず。襄子曰く、義士なり。之を舍せ、謹んで避けむのみと。讓、身に漆して厲となり、炭を呑んで啞となり、行いて市に乞ふ。其妻、識らざるなり、其友、之を識つて曰く、子の才を以て、趙孟に臣事せば、必ず近幸を得む。乃ち爲さむと欲する所を爲せ。顧るに、易からずや。何ぞ、乃ち自ら苦

豫讓

評 豫讓の如きは所謂士は己を信ずる者の爲に死するものなり

評　豫讓の言行眞に後世二心を懷く者を愧ぢしむ

むことかくの如き。讓曰く、不可なり。既に質を委して臣となり、又之を殺すを求むれば、是二心なり。凡そ吾が爲す所のものは、極めて難きのみ。然れども、此を爲す所以のものは、以て、天下後世、人臣となつて二心を懷く者を愧かしめむとするなりと。襄子出づ。讓、橋下に伏す。襄子の馬驚く。之を索めて讓を得、遂に之を殺す。

評　蘇秦合從の策

襄子、伯魯の孫浣を立つ。是を獻子となす。獻子、烈公籍を生む。周の威烈王の命を以て、侯となる。武公、敬公、成侯を歷て、肅侯に至る。秦人、諸侯を恐喝して、地を割かむことを求む。洛陽の人蘇秦あり、秦の惠王に游說して用ゐられず。乃ち往いて、燕の文侯に說き、趙と從親す。燕、之に資し、以て趙に至らしむ。肅侯に說いて曰く、諸侯の卒、秦に十倍す。力を幷せて、西向すれば、秦、必ず破れむ。大王の爲に計るに、六國從親、以て秦を擯くるに若くはなしと。肅侯、乃ち之に資して、以て諸侯と約せしむ。蘇秦、鄙諺を以て、諸侯に說いて曰く、むしろ、鷄口となるも牛後となるなかれと。是に於て、六國從合す。

雞口となるも牛後となる勿れ

蘇秦は、鬼谷先生を師とす。初め、出游し、困んで歸るや、妻、機を下らず、嫂爲めに炊がず、是に至りて、從約の長となり、幷せて、六國に相たり。行いて洛陽を過ぐ。車騎輜重、王者に擬す。昆弟妻嫂、目を側てて敢て視ず。俯伏して、侍して食を取る。蘇秦、笑つて曰く、何ぞ前には倨つて後には恭しきや。嫂曰く、季子の位

評 蘇秦の一言定に人情の機微

高く金多きを見ればなりと。秦、喟然として歎じて曰く、是れ一人の身、富貴なれば、親戚之を畏懼し、貧賤なれば、之を輕易す。況んや、衆人をや、我をして、洛陽負郭の田二頃を有せしむれば、豈に能く六國の相印を佩びむやと。是に於て、千金を散じ、以て宗族朋友に賜ふ。既に從約を定めて趙に歸るや、肅侯、封じて、武安君となす。其後、秦、犀首をして、趙を欺かしめて、從約を敗らむと欲す。齊、魏、趙を伐つ。蘇秦、恐れて趙を去り、而して、從約解く。

肅侯の子武靈王。胡服して、騎射を招いて胡地を略し、中山を滅し、南、秦を襲はむと欲して果さず。子惠文王に傳ふ。惠文、嘗

和氏の璧

藺相如

評 秦趙の外交曲折現時の國際情勢に適應すべし

て、楚の和氏の璧を得たり、秦の昭王、十五城を以て之に易へむことを請ふ。與へざらむと欲すれば、秦の强を恐れ、與へむと欲すれば、欺かれむことを恐る。藺相如、璧を奉じて往かむことを請ひ、城入らざれば、臣請ふ、璧を完うして歸らむと。既に至る。秦王、城を償ふに意なし。相如、乃ち紿いて、璧を取り、怒髮冠を指し、柱下に卻立して曰く、臣の頭、璧と與に碎けむと。從者を遣し、璧を懷にし、間行して先づ歸らしめ、身、命を秦に待つ。秦の昭王、賢として、之を歸す。

秦王、趙王に約して、澠池に會す、相如從ふ。酒を飲むに及び、秦王、趙王に請うて、瑟を鼓せしむ。趙王、之を鼓す。相如、復た

秦王に請うて、缶を擊つて、秦聲を爲せといふ。秦王、肯んせず。相如曰く、五歩の内、臣、頸血を以て、大王に濺ぐを得むと。左右、之を刃せむと欲す。相如、之を叱す。皆靡く。秦王、爲に一たび缶を擊つ。秦、終に趙に加ふるある能はず。趙も亦た盛に之が備をなす。秦、敢て動かず。

趙王歸り、相如を以て上卿となす。位、廉頗の右に在り。頗曰く、我、趙將となつて、攻城野戰の功あり。相如、素より賤人。徒に口舌を以て、我が上に居る。吾、之が下なるを羞づ。我、相如を見れば、必ず之を辱しめむと。相如、之を聞き、朝する毎に、常に病と稱して、共に列を爭ふを欲せず。出づるとき、望み見れば、輒ち車

廉頗

評　文武恪遵相敬し相干さゞるは國家安康の基本原則なり

を引いて避け匿る。其舍人皆以て恥となす。相如曰く、夫れ秦の威を以てするも、相如、之を廷叱して、其群臣を辱かしむ。相如、駑なりと雖も、獨り、廉將軍を畏れむや。顧みて念ふに、强秦の敢て兵を趙に加へざるは、ただ吾が兩人の在るを以てなり。今、兩虎ともに鬪はば、其勢、共に生きず。吾が此を爲す所以は、國家の急を先にして、私讐を後にするなりと。頗、之を聞き、肉袒荊を負ひ、門に詣つて、罪を謝し、遂に刎頸の交をなす。

評　國家の急を先にす

刎頸の交

惠文王の子孝成王立つ。秦、韓を伐つ。韓の上黨、趙に降る。秦、趙を攻む。廉頗、長平に軍し、壁を堅くして出でず。秦人、千金を行うて、反間をなして曰く、秦、獨り、馬服君趙奢の子括の將たる

評　趙括は世俗に所謂疊水鍊なるものにして其の愚にきして豈に兵家のみならんや

平原君

を畏るるのみと。王、括をして、頗に代らしむ。相如曰く、王、名を以て、括を使ふ。柱に膠して瑟を鼓するが如きのみ。括、徒に能く其父の書を讀むも、變に合するを知らざるなりと。王、聽かず。括、少より兵法を學び、以へらく、天下能く當るなしと。父奢と言ふ。難ずる能はざるも、以て然りとなさず。括の母、故を問ふ。奢曰く、兵は死地なり。而かも、括は易く之を言ふ。趙、もし括を將とせば、必ず趙の軍を破らむと。括の將に行かむとするに及び、其母、上書して言ふ、括は使ふべからずと。括、軍に至り、果して、秦將白起に射殺せられ、卒四十萬、皆降り、長平に坑にせらる。

趙相平原君公子勝食客常に數千人。客に公孫龍といふ者あり、

堅白同異の辯

毛遂

堅白同異の辯をなす。秦、趙の邯鄲を攻む。平原君、救を楚に求めむとし、門下の文武備具する者二十人を擇んで、之を俱にせむとす。十九人を得たり。毛遂、自ら薦む、平原君曰く、士の世に處する、錐の囊中に處るが若く、其末、立どころに見はる。今、先生門下に處ること三年、未だ聞こゆるあらず。遂曰く、遂をして囊中に處るを得しむれば、乃ち穎脫して出でむ、ただ、末の見はるるのみに非ずと。平原君、乃ち以て數に備ふ、十九人、之を目笑す。楚に至つて、從を定めて決せず。毛遂、劍を按じ、歷階して升つて曰く、從の利害は、兩言にして決せむのみ、今、日出より言うて、日中まで決せざるは何ぞや。楚王怒り叱して曰く、胡ぞ下らざる。吾、而の

評　十歩の内楚の衆を恃むを得ず

君と言はむ。汝、何する者ぞと。毛遂、劍を按じて前んで曰く、王の遂を叱する所以は、楚國の衆を以てのみ。今十歩の内、楚國の衆を恃むを得ざるなり。王の命は、遂の手に懸れり。楚の強を以て、天下能く當るなし。白起は、小豎子のみ。一戰して、鄢郢を擧げ、再戰して夷陵を燒き、三戰して王の先人を辱かしむ。是れ百世の怨趙の羞づる所なり。合從は、楚の爲にして、趙の爲に非ざるなり。王曰く、唯唯、まことに先生の言の若し。謹んで社稷を奉じて、以て從はむ。遂曰く、雞狗馬の血を取り來れと。銅盤を捧げて、跪いて進めて曰く、王、當に血を歃つて從を定むべし。次は吾が君、次は遂と、左手に盤を持し、右手に十九人を招いて、血を堂下に歃らしめて曰く、公等碌碌、謂ゆる人に因つて事を成す者なりと。平原君、從を定めて歸る。曰く、毛先生、一たび楚に至つて、趙をして、九鼎大呂より重からしむと。遂を以て上客となす。楚、春申君を將として、趙を救ひ、魏の信陵君も、亦た來つて趙を救ふに會し、大に秦軍を邯鄲の下に破る。

評　公等碌碌人に因て事を成す毛遂の一喝痛又快

孝成王の子悼襄王立つ。復た廉頗を用ゐて將となさむと思ふ。時に、頗、奔つて魏に在り。人をして、之を視せしむ。頗の仇、郭開、使者に金を與へて、之を毀らしむ。頗、使者を見、一飯に斗米肉十斤、甲を被つて馬に上り、以て用ゆべきを示す。使者、還つて曰く、廉將軍、なほ善く飯す。然れども、臣と坐し、しばらくして、

評　我趙人を用ひんことを思ふの一語を得ず一掬同情の涙なき呼を純情軍廉失脚の將頗

三たび遺失すと。王以て老いたりとなし、遂に召さず。楚人、頗を魏より迎ふ。頗、楚將となつて功なし。曰く、我、趙人を用ゐむことを思ふと。尋いで卒す。

趙、李牧を得て將となす。さきに、北邊に居り、匈奴を破る。悼襄王の子幽繆王遷立つ。秦王政、兵を遣して趙を攻む。牧、大將となつて、之を敗る。秦、反間を縱つて言ふ、牧、將に反せむとすと。遷、之を誅す。秦兵至つて、遷を虜にす。趙の士大夫、趙嘉を立てて王となす。代に王たり。秦、進み攻めて、嘉を破り、遂に趙を滅して郡となす。

【魏】の先は本、周と同姓、文王の子畢公高の後なり。國絕ゆ、苗裔あり、畢萬といふ。晉に事へて、魏に邑す。數世にして、絳といふ者あり。絳の後四世、桓子といふ者、韓趙とともに、知氏を滅して之を分つ。桓子の孫に文侯斯といふ者あり、周の威烈王の命を以て、侯となり、卜子夏、田子方を以て師となし、段干木の閭を過ぐるに必ず式す。四方の賢士、多くこれに歸す。文侯の子擊、子方に道に遇ひ、車より下つて、伏して謁す。子方、禮を爲さず。擊、怒つて曰く、富貴なる者人に驕るか、貧賤なる者人に驕るか。子方曰く、亦た貧賤なる者、人に驕るのみ。富貴なる者、安んぞ敢て人に驕らむ。國君にして人に驕れば、其國を失ひ、大夫にして人に驕れば、其家を失ふ。夫れ、士の貧賤なる者、言用ゐられず行合は

評　安くに往くとして貧賤を得ざらん是れ涙人の特典なり涙人に阿る者是れ幇間なり

李克名言

ざれば、履を納れて去らむのみ、安に往くとして貧賤を得ざらむやと。擊、之を謝す。文侯、李克に謂つて曰く、先生、嘗て寡人に教ふ、家貧なれば良妻を思ひ、國亂るれば良相を思ふと。今相とする所、魏成に非ざれば翟璜、二子如何。克曰く、居ては、其親む所を視、富みては、其與ふる所を視、達しては、其擧ぐる所を視、窮しては、其爲さざる所を視、貧なれば、其取らざる所を視る。五者以て之を定むるに足れりと。子夏、田子方、段干木は、成の擧ぐる所なり、乃ち成を相となす。翟璜人吳起といふ者あり。始め魯に仕ふ。魯、起をして、齊を擊たしめむと欲す。然るに、起は、齊の女を娶る。之を疑ふ。起、妻を

吳起

評　吳起士卒と衣食を同くす今の武人果して這箇心得あるか

評　國家を保障するもの德に在り險に在らざる知らざるべからず

殺して、以て將たらむことを求め、大に齊師を破る。或ひと曰く、起は殘忍薄行の人なりと。起、罪を得むことを恐れて、魏に歸す。文侯、以て將となし、秦の五城を拔く。起、士卒と衣食を同じうす。卒に疽を病む者あり、起、之を吮ふ。卒の母、聞いて哭して曰く、往年、吳公其父を吮ひ、踵を旋さずして敵に死す。今、又其子を吮ふ。妾、其死所を知らずと。

文侯卒して、子擊立つ、之を武侯となす。武侯、西河に浮んで下り、中流にして、顧みて吳起に謂つて曰く、美なる哉、山河の固、是れ魏國の寶なり、起曰く、德に在つて險に在らず。往古、三苗氏洞庭を左にし、彭蠡を右にし、禹、之を滅す。桀の居、河濟を左に

し、秦華を右にし、伊闕その南に在り、羊腸その北に在り、湯、之を放つ。紂の國、孟門を左にし、太行を右にし、恒山その北に在り、太河その南を經。武王、之を殺す。若し德を修めざれば、舟中の人、皆、敵國たらむ。武侯曰く、善しと。

武侯卒して子惠王罃立つ。東は齊に敗られ、將軍龐涓、太子申と共に皆死し、南は楚に敗られ、西は地を秦に喪ふ。乃ち辭を卑うし、幣を厚うし、以て賢者を招く。孟子至りしが用ゐず。子襄王立つ。

孟子、去つて齊に之く。

魏人に張儀といふ者あり。蘇秦と師を同じうす。嘗て、楚に遊び、楚相に辱めらる。妻慍つて、語あり。儀曰く、吾が舌を視よ、

評　張儀曰く吾舌を視よ尚ほ在りや と當世の張儀何れに在りや

尚ほ在りや否やと。蘇秦の從を約する時、儀を激して、秦に入らしむ。儀曰く、蘇君の時、儀、何ぞ敢て言はむやと。蘇秦、趙を去つて、從、解く。儀、專ら横をなし、六國を連ね、以て秦に事へしむ。秦の惠王の時、儀、嘗て秦兵を以て、魏を伐つて一邑を得たり。復た以て魏に與へ、而かも、魏を欺き地を割いて以て秦に謝せしむ。歸つて、秦の相となり既にして出でて魏の相となり、實は秦の地を爲す。襄王の時、復た歸つて秦に相たり。既にして、復た出でて魏に相として卒す。

魏の安釐王立つ。公子無忌を封じて、信陵君と爲す。無忌、人を愛して、士に下り、食客三千人。秦、趙を攻む、魏王、晉鄙をし

信陵君無忌

て、之を救はしむ。秦の昭王、兵を移して、先づ救ふ者を擊たむと欲す。王、恐れて、晉鄙の兵を止めて、鄴に壁せしめ、又、新垣衍をして、趙に說かしめ、共に秦を尊んで帝となさむとす。魯仲連、往いて、衍を見て曰く、かの秦は、禮義を棄てて首功を上ぶの國なり。若し肆然として天下に帝たらば、連、東海を踏んで死するあらむのみ。衍、再拜して曰く、先生は天下の士なり。吾、敢て復た秦を帝とするを言はずと。趙の平原君の夫人は、無忌の姉なり。趙、急なり。使者、冠蓋相望み、救を無忌に請ふ。無忌、王に請ひ、賓客をして、游說萬端せしむ。客、侯嬴、無忌に敎へて王の幸姬に禱はしめて、晉鄙の兵符を竊み得、且つ力士朱亥を薦めて、與に俱にせしむ。謂ふ、晉鄙符を合せて疑はば、擊ち殺して其軍を奪へと。一に嬴の言の如くし、兵を得て以て進み、大に秦兵を破つて、邯鄲の圍を解く。無忌、敢て魏に歸らず。

秦、魏を伐つ。魏、之を患ひ、人をして、無忌を請はしむ。歸るを肯んぜず。客、毛公、薛公、見えて曰く、魏、急なり。而かも、公子恤はず。一旦、秦、大梁に克つて、先王の宗廟を夷ぐれば、公子、何の面目あつて、天下に立たむやと。無忌、駕を趣して還る。諸侯、無忌の魏將となりしを聞き、皆、救を遣す。無忌、五國の兵を率ゐて、秦兵を河內に敗り、追うて、函谷關に至つて還る。無忌卒す。

卒十八年にして、魏王假立ち、後二年、秦王政、兵を遣して魏を伐ち、王假を殺し、魏を滅して郡となす。

【韓】の先は、本周と同姓、武王の子韓侯の後なり。國絶ゆ。其後裔、晉に事へて韓氏となる。韓武子の三世を厥といふ。厥の五世、康子に至り、趙魏と共に知氏を滅す。又二世を景侯虔といふ。周の威烈王の命を以て侯となる。

韓相俠累、濮陽の嚴仲子と惡むことあり。仲子、軹人聶政の勇を聞き、黄金百鎰を以て、政の母の壽をなし、因つて、仇を報いむと欲す。政曰く、老母在り。政の身、未だ以て人に許すべからざるなりと。母卒するに及び、仲子、乃ち政をして之を圖らしむ。俠累、

刺客聶政と其姉

評　聶政は義士なり其姉は義婦なり

申不害黄老刑名之學

方に府に坐し、兵衛甚だ嚴なり。政、直に入つて、之を刺し、因つて、自ら面を皮はぎ、眼を抉る。韓人、其尸を市に暴して、購問すれども、能く識るなし、姉嬰、往いて、之を哭して曰く、是れ深井里の聶政なり。妾が在るを以ての故に、重く自ら刑し、以て蹤を絶つ。妾、奈何ぞ、身を沒するの誅を畏れて、終に賢弟の名を沒せむやと。遂に政の尸の傍に死す。

景侯より四世、哀侯に至つて、徙つて鄭に都す。哀侯より二世、昭侯に至る。鄭人申不害、黄老刑名の學を以て、昭侯の相となり、國治まり、兵强し。昭侯、弊袴あり、命じて、之を藏せしめ、以て左右に賜はらず。侍者曰く、君も亦た不仁者なり。昭侯曰く、明主

明主愛一嚬一笑

は一嚬一笑を愛む。嚬すれば爲に嚬する者あり、笑へば爲に笑ふ者あり。今、褒は、晉に嚬笑のみならむや。吾、必ず有功の者を待たむと。

昭侯卒して、子宣惠王立つ。三世にして、桓惠王に至る。韓の上黨の守、趙に降り、趙、秦兵を受くるを致して、長平の敗あり、又、一世にして、王安に至り、秦王政、將を遣して、安を虜にし、遂に韓を滅ぼして郡となす。

【楚】の先は顓頊より出づ。顓頊の子は、高辛の火正たり、命づけて、祝融といふ。弟吳回、復た其職に居る。吳回より二世、季連といふ者あり。芈姓を得たり。季連の後に鬻熊あり。周の文王に事ふ。成王、其子熊繹を丹陽に封ず。夷王の時に至つて、楚子熊渠といふ者、僭して、王となる。十一世にして、春秋に至り、武王といふ者あり、益す强大。文王に至つて、始めて、郢に都す。成王、齊の桓公と召陵に盟ひ、尋いで、宋の襄公と霸を爭ひ、後に晉の文公と城濮に戰ふ。穆王を歷て、莊王に至る。位に卽いて三年。令を出さず。日夜樂をなし、國中に令し、敢て諫む者は死せむといふ。伍舉曰く、鳥あり、阜に在り、三年蜚ばず、鳴かず、是れ何の鳥ぞや。王曰く、三年飛ばざるは、飛べば將に天を衝かむとすればなり。三年鳴かざるは、鳴けば將に人を驚かさむとすればなりと。蘇從、亦た入つて諫む。王、乃ち左に從の手を執り、右に刀を抽いて、以て

莊王

評　莊王三年蜚ばず鳴かず是れ大に學ぶべき所なり

孫叔敖

鐘鼓の懸を斷ち、明日、政を聽き、伍舉、蘇從に任ず。國人、大に悅ぶ。又、孫叔敖を得て相となし、遂に諸侯に霸たり。

共王、康王、郟敖、靈王、平王、昭王、惠王、簡王、聲王、悼王、肅王、宣王、威王を經て、懷王に至る。秦の惠王、齊を伐たむと欲す。楚の與に從親するを恐れ、乃ち張儀をして楚王に說かしめて曰く、王、關を閉ぢて齊に絕たば、請ふ、商於の地六百里を獻ぜむと。懷王、之を信じ、勇士をして、北、齊王を辱しめしむ。齊王、大に怒つて、秦と合す。楚の使、地を秦より受けむとす。儀曰く、地は、某より某に至るまで、廣袤六里と。懷王、大に怒つて、秦を伐つて、大に敗る。秦の昭王、懷王と黃棘に盟ひ、既にして、書を

評　屈原は純情の人なり

春申君黃歇

懷王に遺り、願はくは、君王と武關に會せむといふ。屈平可かず。子蘭、王に勸めて、行かしむ。秦人、之を執へて以て歸る。楚人、其子頃襄王を立つ。懷王、秦に卒す。楚人、之を憐んで、親戚を悲むが如し。初め、屈平、懷王に任ぜらる、讒を以て疏ぜらるるや、離騷を作り、以て自ら怨む。頃襄王の時に至り、又、讒を以て、江南に遷され、遂に汨羅に投じて以て死す。秦、郢を拔く。楚、陳に徙る。頃襄王卒して、考烈王立つ。又、壽春に徙る。

春申君黃歇、相の事を行ふ。其時に當つて、齊に孟嘗君あり、魏に信陵君あり、趙に平原君あり、楚に春申君あり、皆、客を好む。春申君、食客三千餘人、平原君、人を春申君に使し、楚に夸らむと

荀卿

欲し、玳瑁の簪を爲り、刀劍の室、飾るに珠玉を以てす。春申君の上客、皆、珠履を躡んで、以て之を見る。趙の使大に慙づ。趙人荀卿、楚に至る。春申君、以て蘭陵の令となす。

李園、妹を以て、春申君に獻ず。娠むあつて後に、之を考烈王に納れ、幽王を生む。園、盜をして春申君を殺し。以て口を滅せしめ以て、楚の政を專らにす。幽王卒す。弟哀王、楚人の弑する所となる。其庶兄負芻を立つ。秦王政、將を遣して楚を破り、負芻を虜にし、楚を滅して郡となす。

【燕】姬姓、召公奭の封ぜられし所なり。三十餘世、文公に至り、嘗て、蘇秦の說を納れ、六國に約して從をなす。文公卒す。易王噲立つ。十年、國を以て、其相、子之に讓り、南面して、王の事を行はしめ、而して、噲老いて政を聽かず、顧みて臣となる。國、大に亂る。齊、燕を伐つて、之を取り、子之を醢にして噲を殺す。

燕人、太子平を立てて君となす。之を昭王となす。死を弔ひ、生を問ひ、辭を卑うし、幣を厚うし、以て賢者を招く。郭隗に問うて曰く、齊、孤の國亂るるに因つて、燕を襲ひ破る。孤、極めて、燕の小にして以て報ずるに足らざるを知る。まことに、賢士を得て、國を與にし、以て先王の恥を雪がむこと、孤の願なり。先生、可なる者を視よ、身、之に事ふるを得む。隗曰く、古しへの君、千金を以て、涓人をして千里の馬を求めしむる者あり、死馬の骨を五百金

評　郭隗昭王をして五百金を以て死馬の骨を買はしむ而かも隗自らは萬金も尙ほ得易からざるの名士なり

請ふ隗より始めよ

に買うて返る。君、怒る。涓人曰く、死馬すら、之を買ふ。況んや、生けるものをや、馬、今至らむと。朞年ならずして、千里の馬、至るもの三。今、王、必ず士を致さむと欲せば、先づ隗より始めよ、況んや、隗より賢なる者をやと。是に於て、昭王、隗の爲に宮を改築して、之に師事す。是に於て、士、爭つて、燕に趨く。樂毅は魏より往く。以て亞卿となし、國政を任ず。既にして、毅をして、齊を伐たしめて、臨淄に入る。齊王、出でて走る。毅、勝に乘じて、六月の間に、齊の七十餘城を下し、惟だ莒と卽墨とのみ下らず。昭王卒す。惠王立つ。惠王、太子たりし時、既に毅に快からず、田單、乃ち反閒を縱つて曰く、毅、新主と隙あり、敢て歸らず。齊を

樂毅

評　戰國の世、反閒橫行、名將賢臣爲めに禍に遇ふ者極めて多し、顧みるべきなり

伐つを以て名となす。齊人、惟だ他將來つて、卽墨殘れむことを恐ると。惠王、果して、毅を疑ひ、乃ち騎劫をして、代つて將たらしめて毅を召す。毅、趙に奔る。田單、遂に燕を破るを得て、齊城を復す。

惠王の後、武成王、孝王あり。王喜に至る。喜の太子丹、秦に質たり。秦王政、禮せず。怒つて、亡げて歸り、秦を怨んで、之に報せむと欲す。秦の將軍樊於期、罪を得て、亡げて燕に之く。丹、受けて、之を舍す。丹、衞人荊軻の賢を聞き、辭を卑うし、禮を厚うして、之を請ひ、奉養至らざるなし。軻を遣さむと欲す。軻、樊於期の首及び燕の督亢の地圖を得て、秦に獻ぜむことを請ふ。丹、於

評　壯士荊軻賦する所風蕭蕭の名句後人を奮起せしむ

期を殺すに忍びず。軻、自ら意を諷して曰く、願はくは、將軍の首を得て、以て秦王に獻ぜむ。必ず喜んで臣を見む。臣、左手に其袖を把り、右手に其胸を揕せば、將軍の仇、報じて、燕の恥、雪がむと。於期、慨然として、遂に自刎す。丹、奔り往いて、伏して哭す。乃ち函を以て其首を盛り、又嘗て天下の利匕骨を求め、藥を以て、之を焠くす、以て人を試るに、血、縷の如く、立どころに死す。乃ち軻を裝遣す。行いて、易水に至り、歌うて曰く、風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不二復還一と。時に白虹日を貫く。燕人、之を畏る。軻、咸陽に至る。秦王政、大に喜んで、之を見る。軻、圖を奉じて進む。圖窮まつて、匕首見はる。王の袖を把つて、之を揕す、未だ身に及ばず。王、驚き起つて、袖を絶つ。軻、之を逐ふ。柱を環つて走る。秦の法、群臣、殿上に侍する者は、尺寸の兵を操るを得ず。左右、手を以て、之を搏つ。且つ曰く、王、劍を負へと。遂に劍を拔いて、其左股を斷つ。軻、匕首を引いて、王に擿つ。中らず。遂に體解して徇ふ。秦王、大に怒り、益々兵を發して、燕を伐つ。喜、丹を斬り、以て獻ず。後三年、秦兵、喜を虜にし、遂に燕を滅して郡となす。

風蕭蕭之歌

白虹日を貫く

【秦】の先は、本顓頊の裔。大業といふ者、栢翳を生む。舜、姓を嬴氏と賜ふ。其後に蜚廉あり。蜚廉の子を女防といふ。女防の後に非子あり。馬を好む。周の孝王の爲に、馬を汧渭の閒に主り、馬、

繆公と百里傒

大に蕃息す。土を分つて附庸となし、之を秦に邑せしむ、二世を閱し、秦仲に至り。始めて大なり。莊公を歷て、襄公に至る。犬戎、幽王を殺すや、襄公、周を救うて功あり、封じて諸侯となし、賜ふに岐西の地を以てす。

文公、寧公、出子、武公、德公、宣公、成公を歷て、繆公に至る。百里傒といふ者あり。故の虞の大夫なり。繆公の夫人の媵となり、秦を亡げて宛に去る。楚人、之を執ふ。繆公、其賢を聞き、五羖羊の皮を以て、之を贖ひ得たり。之に政を授け、號して、五羖大夫といふ。百里傒、其友蹇叔を進む。以て上大夫となす。繆公、晉の惠公を送つて晉に歸へす。既にして、秦に倍き、韓に合戰す。繆公、晉軍に圍まる。岐下嘗て公の馬を食ふ者、三百人あり。馳せて晉の軍を冒す。晉、圍を解き、遂に繆公を脫して、以て反る。是より先、繆公、善馬を亡ふ。野人共に得て之を食ふ。吏、逐ふて得たり。之を法にせむと欲す。公曰く、善馬を食ふ者、酒を飲まざれば、人を傷ると。皆、酒を賜ふて、之れを赦す。是に至り、秦、晉を擊つと聞き、皆、從はむことを願ひ、鋒を推し、死を爭うて、以て德に報ず。繆公、後、又、晉の文公を送つて、國に歸へす。立つて、諸侯に霸たり。晉の文公卒す。秦、孟明を遣して、鄭を襲はしめ、因つて、滑を破る。晉の襄公、之を崤に破る。繆公、孟明を替てず。國政を修めしむ。後、晉を伐つて、志を得、遂に西戎に霸たり。

孝公

評　商鞅帝王の別を說く者三皇五帝を而も知らず

評　今世家獨り商鞅の制を稍安ずるに比し肩を得る石法なるは古の後あり

康公、共公、桓公、景公、哀公、惠公、悼公、厲公、共公、躁公、懷公、靈公、簡公、惠公、出子、獻公を經て、孝公に至る。河山以東、强國六、小國十餘、皆、夷狄を以て秦を遇し、擯けて諸侯の盟に與らしめず。孝公、令を下す、賓客群臣、能く奇計を出して、秦を强うする者あらば、吾、其れ官を尊くし、之に分土を與へむと。衞の公孫鞅、秦に入り、嬖人景監に因つて、以て見え、說くに帝道、王道を以てし、三變して霸道となり、然る後に、强國の術に及ぶ。公、大に悅び、法を變せむと欲するも、天下の己を議せむことを恐る。鞅曰く、民は與に始を虞かるべからず、而かも、與に成を樂むべしと。卒に令を定め、民をして、什伍をなさしめ、相收司して連坐せしめ、姦を告げざる者は腰斬し、姦を告ぐる者は敵を斬ると賞を同じうし、姦を匿す者は、敵に降ると罰を同じうし、軍功ある者は、各、爵を受け、私鬪を爲す者は、各、輕重を以て刑せらる。大小力を戮せて、畊職を本業とし、粟帛を致すこと多き者は、其身を復し、末利を事とし、及び怠つて貧しき者は、擧げて以て收孥となす。令、既に具はつて、未だ布かず。三丈の木を國都の市の南門に立て、民を募り、能く北門に徙す者あらば、十金を與へむといふ。民、之を怪んで、敢て徙すなし。復た曰く、能く徙す者には、五十金を予へむと。一人あり、之を徙す。輒ち五十金を予ふ。乃ち令を下す。太子、法を犯す。鞅曰く、法の行はれざる

は、上より之を犯せばなり。君の嗣は、刑を施すべからずと。其傅公子虔を刑し、其師公孫賈を黥す。秦人、皆、令に趨く。之を行ふこと十年、道に遺ちたるを拾はず、山に盗賊なく、家給し、人足り、民、公戰に勇にして、私鬬に怯に、鄕邑大に治まる。始め、令の不便を言ひし者、來つて、令の便を言ふ。鞅曰く、皆、法を亂る民なりと。盡く之を邊に遷す。民敢て議するなし。民をして、父子兄弟、同室内息する者を禁となし、井田を廢し、阡陌を開き、更めて、賦税の法を爲る。秦人富强。鞅を商於の十五邑に封じ、號して商君といふ。孝公薨ず。惠文王立つ。公子虔の徒、鞅の反せむと欲するを告ぐ。鞅、出亡して、客舍に止まらむと欲す。舍人曰く、

評　商鞅法を立て法の爲めに身を亡ぼす

評　甘茂名言

商君の法、人の驗なき者を舍せば、之に坐す。鞅、歎じて曰く、法を爲すの弊、一に此に至れるかと。去つて魏に之く。魏、受けず、之を秦に入る。秦人、車裂して以て徇ふ。鞅、法を用ゆること酷。歩、六尺に過ぐる者は、罰あり。灰を道に棄つる者は、刑せらる。嘗て、渭に臨んで囚を論ずるや、渭水盡く赤し。

惠文王薨ず。子武王立つ。武王、甘茂をして、韓を伐たしむ。茂曰く、宜陽は大縣、其實は郡なり。今、數險を倍いて、行くこと千里、之を攻むること難し。魯人。曾參と姓名を同じうする者あり。人を殺す。人、其母に告ぐ、母織ること自若たり。三人、之を告ぐるに及び、母、杼を投じ、機を下り、墻を踰えて走る。臣の賢は、

曾參に及ばず、王の臣を信ずる、又其母に如かず。臣を疑ふ者、ただ三人のみに非ず。臣、大王の杼を投ぜむことを恐る。魏の文侯、樂羊をして、中山を伐たしむ。三年にして、後に之を拔く。反つて、功を論ず。文侯、之に謗書一篋を示す。再拜して曰く、臣の功に非ず、君の力なりと。今、臣は羈旅の臣なり、樗里子、公孫奭、韓を挾んで譏らば、王必ず之を聽かむと。王曰く、寡人聽かずと。乃ち息壤に盟ふ。茂、宜陽を伐つ、五月にして拔けず。二人、果して、之を爭ふ。武王、茂を召して、兵を罷めむと欲す。茂曰く、息壤彼に在りと。乃ち悉く兵を起し、茂を佐け、遂に之を拔く。武王力あり、戲を好む。力士任鄙、烏獲、孟說、皆、大官に至る。

評 范雎の人となり一部の支那人氣質を代表す

王、孟說と鼎を擧げ、脈を絕つて死す。

弟昭襄王稷立つ。魏人范雎といふ者あり、嘗て、須賈に從つて、齊に使す。齊王、其辯口を聞いて、乃ち之に金及び牛酒を賜ふ。賈、雎が國の陰事を以て齊に告げしを疑ひ、歸つて、魏の相魏齊に告ぐ。魏齊怒つて、雎を笞擊し、脅を折り、齒を拉く。雎、佯つて死す。卷くに簀を以てし、厠中に置き、醉客をして、更る之に溺せしめ、以て後を懲らす。雎、守者に告げて、出づるを得、姓名を更めて、張祿といふ。秦の使者王稽、魏に至る。潛に載せて、與に歸り、昭襄王に薦め、以て客卿となす。敎ふるに、遠交近攻の策を以てす。時に穰侯魏冉、事を用ゆ。雎、王を說いて、之を廢し、代

評 遠交近攻之策以夷制夷

つて、丞相となり、應侯と號す。魏、須賈をして、秦に聘せしむ。睢、敝衣閒歩、往いて之を見る。賈、驚いて曰く、范叔まことに恙なきかと。留坐飲食せしむ。曰く、范叔一寒、かくの如きかと。一綈袍を取つて、之に贈る。遂に賈の爲に御して、相府に至る。曰く、我、君が爲に、先づ入つて相君に通ぜむと。賈、其久しくして出でざるを見、門下に問ふ。門下曰く、范叔といふ者なし。鄕の者は吾が相張君なりと。賈、欺かれしを知り、乃ち膝行して、入つて罪を謝す。睢、坐して、之を責讓して曰く、爾の死せざるを得る所以のものは、綈袍戀戀として、なほ故人の意あるを以てのみと。乃ち大に供具して、諸侯の賓客を請ひ、莝豆を其前に置いて、

綈袍戀戀

評　一飯の德も必ず償ひ、睚眦の怨も必ず報ずるは君子の事にあらず

評　蔡澤曰四時之序成功者去

之を馬食せしめ、歸つて、魏王に告げしめて曰く、速に魏齊の頭を斬つて來れ。然らざれば、且さに大梁を屠らむとすと。賈、歸つて、魏齊に告ぐ。魏齊。出走して死す。睢既に志を秦に得、一飯の德も必ず償ひ、睚眦の怨も必ず報ず。

王、既に睢の策を用ゐ、歲ごとに、兵を三晉に加ふ。斬首數萬。周の赧王、恐れ、諸侯と從を約して、秦を伐たむと欲す。秦、周を攻む。赧王、秦に入り、頓首して罪を請ひ、其邑三十六を獻ず。周亡ぶ。秦將武安君白起、范睢と隙あり。廢して士伍となし、劍を賜うて、杜郵に死す。王、朝に臨んで、歎じて曰く、內に良將なく、外に强敵多しと。睢、懼る。蔡澤曰く、四時の序、功成る者は去る

と。睢、病と稱し、澤、之に代る。

昭襄王薨じ、子孝文王柱立つ。薨ず。子莊襄王楚立つ。薨ず。嗣いで王たる者は政なり。遂に六國を幷す、之を秦の始皇帝となす。

黃帝より以來、天下、百里の國を列する萬區。中國より、以て四裔に達す。中國の制、王制に攷ふべきもの、九州。千七百七十三國。古しへの侯を建つる、各其國に君として、各其民を子とし、而かも、天子を宗主とす。夏殷を歷て周に至り、强は弱を併せ、大は小を呑み、春秋十二國の外、存するもの幾もなし。戰國存するもの六七、是に至つて、遂に秦に併せらる。

西紀自前二四六至二〇六
呂不韋
評　奇貨可居

新譯

十八史略　卷之二

秦

【秦始皇帝】名は政。始め、邯鄲に生る。昭襄王の時、孝文王柱太子たり。庶子楚あり。趙に質たり。陽翟の大賈呂不韋、趙に適き、之を見て曰く、是れ奇貨居くべしと。乃ち秦に適いて、太子の妃華陽夫人の姉に因つて、以て妃に說き、楚を立てて適嗣となす。不韋、因つて、邯鄲の美妃を納る。娠むるあつて、楚に獻じ、政を生む。實は呂氏なり。孝文王、立つて三日にして薨ず。楚立つ、之を

莊襄王となす。四年にして薨ず。政生れて十三歲。遂に立つて王となる。母を太后となす。不韋、莊襄王の時に在つて、既に、秦の相國たり。是に至つて、文信侯に封ぜらる。太后、復た不韋と通ず。王、既に長ず。不韋、事覺はれて自殺す。太后、廢せられて、別宮に居る。茅焦、諫む。母子、乃ち復た初の如し。

評　李斯の說客論大に味ふべし

秦の宗室大臣、議して曰く、諸侯の人、來つて仕ふる者は、皆、其主の爲に游說するのみ。請ふ、一切、之を逐はむと。是に於て、大に索めて、客を逐ふ。客卿李斯、上書して曰く、むかし、穆公、由余を戎に取り、百里傒を宛に得、蹇叔を宋より迎へ、不豹、公孫枝を晉に求め、國を幷すこと二十、遂に西戎に霸たり。孝公、商鞅の法を用ゐて、諸侯親服し、今に至つて治强なり。惠王、張儀の計を用ひて、六國の從を散じ、之をして、秦に事へしむ。昭王、范雎を得て、公室を强うす。此の四君、皆、客の功を以てす。客、何ぞ秦に負かむや。泰山は土壤を擇ばず、故に大なり。河海は細流を擇ばず、故に深し。今、乃ち黔首を棄てて、以て敵國を資け、賓客を卻けて、以て諸侯を業く。謂ゆる寇に兵を藉して、盜に糧を齎らすなりと。王、乃ち李斯に聽いて、其官を復し、逐客の令を除く。斯は楚人、嘗て、荀卿に學ぶ。秦、卒に其謀を用ゐて、天下を幷す。韓非といふ者あり、刑名に善し。韓の爲に秦に使す。因つて上書す。王、之を悅ぶ。斯、疾んで、之を間し、遂に吏に下す。斯、之に藥

韓非子

を遣つて自殺せしむ。

十七年、内史勝、韓を滅し、十九年、王翦、趙を滅し、二十三年、王賁、魏を滅し、二十四年、王翦、楚を滅し、二十五年、王賁、燕を滅し、二十六年、王賁、齊を滅し、秦王、始めて、天下を幷す。自ら以へらく、德は三皇を兼ね、功は五帝に過ぎたりと。更め號して皇帝といひ、命を制となし、令を詔となし、自ら稱して朕といふ。制して曰く、死して行を以て謚となすは、乃ち是れ、子、父を議し、臣、君を議するなり、甚だ謂なし。今より以來、謚法を除かむ。朕を始皇帝となし、後世以て數を計らむ。二世三世より萬世に至り、之を無窮に傳へむと。

評　始皇自らを稱す。其の稚氣壯氣とす。德は三皇に兼ねたり。功は五帝に過ぎたりと號し、皇帝と稱す。愛憎恣べし。

天下の兵を收めて、咸陽に聚め、銷して、以て鐘鐻金人十二を爲る。重さ各千石。

天下の豪富を咸陽に徙すこと十二萬戸。丞相王綰等、言ふ、燕、趙、荊は地遠し、王を置かざれば、以て之を鎮むるなからむ。請ふ、諸子を立てよと。始皇、この議を下す。廷尉李斯曰く、周の武王の封ぜし所、子弟同姓、甚だ衆し。後、疎遠に屬するや、相攻擊すること、仇讐の如し。今、海内、陛下の神靈に賴り、一統して、皆、郡縣となる。諸子功臣、公の賦稅を以て、之に賞賜せば、甚だ足つて、制し易からむ。天下、異意なくむば、安寧の術なり。諸侯を置くは不便なり。始皇曰く、天下、始めて定まり、又復た國を立つる

分天下爲三十六郡

徐市等蓬萊に行き不死の藥を求む

は、是れ兵を樹つるなり。而かも、其寧息を求む、豈に難からずや。廷尉の議、是なりと。天下を分つて、三十六郡となし、守尉監を置く。

二十八年、始皇、東、郡縣を行り、鄒嶧山に上り、石を立てて、功業を頌し、泰山に上り、石を立てて、封じて祠祀す。既に下るや風雨暴に至る。樹下に休ふ。其松を封じて、五大夫となす。梁父に禪す。遂に東して、海上に遊ぶ。方士齊人徐市等、上書して、童男童女と海に入つて、蓬萊、方丈、瀛洲、三神山の仙人及び不死の藥を求めむことを請ふ。其言の如くし、市等をして行かしむ。始皇、江に浮んで湘山に至る。大風、幾んど渡る能はず。博士に問うて曰く、湘君は何の神ぞ。對へて曰く、堯の女、舜の妻と。始皇、大に怒り、其樹を伐り、其山を赭にす。

評　張良鐵椎を操て始皇を白浪沙中に擊たしむ。後人詩あり曰く——一擊事中膽氣豪、祖龍社稷已驚搖。如何十二金人外、猶有民間鐵未銷

韓人張良、五世韓に相たりしを以て、韓の亡ぶるや、爲に仇を報ゐむと欲す。始皇東遊して、博浪沙中に至る。良、力士をして、鐵椎を操つて、始皇を擊たしむ。誤つて、副車に中る。始皇驚き、求むれども得ず、天下に令して、大に索む。

三十一年、臘を更めて嘉平となす。

三十二年、始皇、北邊を巡る。方士盧生、海に入つて還り、圖書を奏錄す。曰く、秦を亡ぼす者は胡ならむと。始皇、乃ち蒙恬を遣し、兵三十萬人を發し、北、匈奴を伐たしむ。長城を築き、臨洮より

評　萬里長城を築く。詩あり——祖

舜宗堯自太平、秦皇何事苦蒼生、不知禍起蕭墻內、虛築萬里胡防城。又曰、秦築長城比鐵牢、蒹戎不敢過臨洮、焉知萬里連雲勢、不及堯階三尺高。

焚書坑儒。後人詩あり竹帛煙消帝業虛、關河空鎖祖龍居、坑灰未冷山東亂、劉項元來不讀書。又曰、謗聲易弭怨難除、秦法雖殿亦甚疎、夜半橋邊呼孺子、人間猶有未燒書。

り起り、遼東に至る。延袤萬餘里、威、匈奴に振ふ。

三十四年、丞相李斯、上書して曰く、異時、諸侯並び爭ひ、厚く游學を招く。今、天下既に定まり、法令一に出づ、百姓家に當らば則ち農工に力め、士は法令を學習すべし。今、諸生、今を師とせずして、古を學び、以て當世を非り、黔首を惑亂し、令の下るを聞けば、各、其學を以て、之を議し、入つては心に非とし、出でては巷に議し、群下を率ゐて、以て謗を造す。臣請ふ、史官の秦記に非ざるは、皆、之を燒かむ。博士官の職とする所に非ずして、詩書百家の語を藏する者あらば、皆、守尉に詣つて、雜へて之を燒かむ。詩書を偶語する者は、棄市せむ。古しへを以て今を非る者は族せむ。

去らざる所の者は、醫藥卜筮種樹の書。若し、法令を學ばむと欲するあれば、吏を以て師となさしめむ。制して曰く、可なりと。

三十五年、侯生、盧生、相與に始皇を譏議し、因つて、亡げて去る。始皇、大に怒つて曰く、盧生、吾、尊んで之に賜ふこと、甚だ厚し。今乃ち我を誹謗す。諸生の咸陽に在る者、吾、人をして廉問せしむるに、或は妖言をなして、以て黔首を亂ると。是に於て、御史をして、悉く案問せしむ。諸生傳へて、相告別し、乃ち自ら除す。禁を犯す者、四百六十餘人。皆、之を咸陽に坑にす。長子扶蘇、諫めて曰く、諸生、皆孔子を誦法す。今、上、皆法を重くして之を繩す。臣、天下安からざらむことを恐ると。始皇怒り、扶蘇をし

て、北、蒙恬の軍を上郡に監せしむ。

始皇以爲らく、咸陽は人多くして、先王の宮庭小なりと。乃ち朝宮を渭南上林苑中に營作す。先づ前殿を阿房に作る。東西五百歩、南北五十丈。上には萬人を坐せしむべく、下には五丈の旗を建つべし。周馳して、閣道を爲り、殿下より、直に南山に抵る。南山の顛に表して以て闕を爲る。複道を爲り、阿房より渭を渡り、之を咸陽に屬す。以て天極の閣道、漢を絶つて營室に抵るに象る。阿房宮、未だ成らず、成らば、更に名を擇ばむと欲す。天下、之を阿房宮といふ。

始皇、人と爲り剛戾自ら用ゐ、事、大小となく、皆、上に決し、

阿房宮

評　始皇は代の英主、絶氣の豪帝。一人の眞王、中國の大宇を陸離其政に慈心を斷ぜず。仁恩を施ぜず。安民を惜しむ。武威を過ぐ。基業を永續せず。

衡石を以て書を量るに至り、日夜程あり、休息するを得ず。權勢を貪る、斯の如きに至る。

秦人出でて使する者あり。還る時、人の璧を持して之を授くるに遇ふ。曰く、吾が爲に、滈地君に遺れ、明年、祖龍死せむと。

三十七年、始皇出遊す、丞相斯、少子胡亥、官者趙高從ふ。始皇、沙丘の平臺に崩ず。秘して、喪を發せず。詐つて詔を受くとなし、胡亥を立て、扶蘇に死を賜ふ。始皇を轀輬車中に載せ、一石の飽魚を以て、其臭を亂し、咸陽に至つて、始めて喪を發す。胡亥卽位す、之を二世皇帝となす。

【二世皇帝】名は胡亥。元年、東、郡縣を行る。趙高に謂つて曰く、

評　二世は是れ暗主の標本。乃父始皇帝作る所の阿房宮と好一對。

吾、耳目の好む所を盡し、心志の樂を窮め、以て吾が年を終らむと欲す。高曰く、陛下法を嚴にし、刑を刻にし、盡く故臣を除いて、更めて親信する所を置けば、枕を高うし、志を肆にせむと。二世、之を然りとし、更めて法律を爲り、務めて益す刻深にす。公子大臣、多く僇死す。

陽城の人陳勝、字は涉、少にして人の與に傭耕す。畊を輟めて、隴上に之き、悵然之を久しうして曰く、苟くも富貴なれば、相忘るるなからむ。傭者笑つて曰く、若、傭畊をなす、何ぞ富貴ならむや。勝大息して曰く、ああ燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らむやと。是に至つて、吳廣と共に兵を蘄に起す。時に閭左を發して、漁陽に戍す。勝廣、屯長たり。大雨に遇うて、路通ぜず。乃ち徒屬を召して曰く、公等、期を失す、法、當に斬らるべし。壯士死せざれば已む、死すれば、大名を擧げむ。王侯將相寧ぞ種あらむやと。衆、皆之に從ふ。乃ち詐つて公子扶蘇、項燕と稱し、大楚と稱す。勝、自立して將軍となり、廣は都尉となる。大梁の張耳、陳餘、軍門に詣つて上謁す。勝、大に喜び、自立して王となり、張楚と號す。諸郡縣、秦法に苦み、爭つて、長吏を殺し、以て涉に應ず。

謁者東方より來り、反者を以て聞す。二世怒り、之を吏に下す。後に使者至る。上、之に問ふ。曰く、群盜、鼠竊狗偸憂ふるに足らざるなりと。上悅ぶ。

陳勝吳廣　燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや

王侯將相寧ぞ種あらんや

劉季字邦
蕭何曹參
項籍字羽
書は姓名を記すれば足る。劍は一人の敵のみ

陳勝、善き所の陳人武臣を以て、將軍となし、耳餘を校尉となし、趙の地を徇へしむ。趙に至つて、武臣、自立して趙王となる。

沛人劉邦、沛より起る。父老、爭つて令を殺し、迎へ立てて沛公となす。沛邑の掾主吏、蕭何、曹參、爲に沛の子弟を收めて、三千人を得たり。

項梁は楚將項燕の子なり。嘗て人を殺し、兄の子籍と仇を吳中に避く。籍、字は羽。少時、書を學べども成らず、去つて劍を學べども、又、成らず。梁怒る。籍曰く、書は以て姓名を記すれば足る。劍は一人の敵のみ、學ぶに足らず。願はくは、萬人の敵を學ばむと。梁、乃ち籍に兵法を敎ふ。會稽の守殷通、兵を起して、陳涉に應せむと欲し、梁をして將たらしむ。梁、籍をして、通を斬らしめ、其印綬を佩び、遂に吳中の兵を擧げて、八千人を得たり。籍、裨將となる。時に年二十四。

齊人田儋、自立して齊王となる。

趙王武臣、將、韓廣をして、燕の地を略せしむ。廣、自立して燕王となる。

楚將周市、魏の地を定め、梁の公子咎を迎へ、立てて魏王となす。

二年、吳廣、其下の爲めに殺さる。以て秦に降る。

陳勝、其御莊賈の爲めに殺さる。

秦將章邯、魏を擊つ。齊楚、之を救ふ。齊王儋、魏王咎、周市と

皆敗死す。

趙王武臣、其將李良の爲めに殺さる。張耳、陳餘、趙歇を立てて王となす。

居鄮の人范增、年七十、奇計を好む。往いて、項梁を說いて曰く、陳勝、事を首めしが、楚の後を立てずして自立す。其勢、長からず。今、君、江東より起り、楚の蠭起の將、爭ふて君に附く者は、君が世世、楚の將にして、必ず能く楚の後を復立せんと以へばなりと。是に於て、項梁、楚の懷王の孫心を求め得て、立てて楚の懷王となし、以て民の望に從ふ。

趙高、丞相李斯と隙あり。高、二世に侍し、燕樂して、婦人前に居るに方り、人をして、丞相斯に、事を奏すべしと告げしむ。斯、上謁す。二世、怒つて曰く、吾、嘗て閒日多し。丞相、來らず。吾、方に燕私すれば、丞相輒ち來る。高曰く、丞相の長男李由、三川の守となり、盜と通ず、且つ丞相外に居て、權、陛下より重しと。二世、之を然りとし、斯を吏に下し、五刑を具へて、咸陽の市に腰斬す。斯、出づる時、顧みて、中子に謂つて曰く、吾、若と復た黃犬を牽き、共に上蔡の東門を出でて、狡兎を逐はむと欲するも、豈に得べけむやと。遂に父子相哭して、三族を夷せらる。

中丞相趙高、秦の權を專らにせむと欲し、群臣の聽かざるを恐る。乃ち、先づ驗を設く。鹿を持して二世に獻じて曰く、馬なり

范增

評　古來姦邪の人を陷るゝ概ね此途に依る

趙高李斯を陷る

評　趙高鹿を指して馬と謂はしむ。

眞に馬鹿の骨頂

と。二世笑つて曰く、丞相誤れるか、鹿を指して馬となすと。左右に問ふ、或は默し、或は言ふ。高、陰に諸の鹿と言ひし者に中つるに法を以てす。後、群臣、皆、高を畏れて、敢て其過を言ふなし。

項梁、秦將章邯と戰つて敗死す。宋義、先づ其必ず敗るるを言ふ。梁、果して敗る。秦、趙を攻む。楚の懷王、義を以て上將となし、項羽を次將となし、趙を救ふ。義、驕る。羽、之を斬つて、其兵を領し、大に秦兵を鉅鹿の下に破り、王離等を虜にし、秦將章邯、董翳、司馬欣を降し、羽、諸侯の上將軍となる。

是れより先、趙高、數ば云ふ。關東の盜、能く爲す無しと。秦兵の數ば敗るるに及び、高、二世の怒を恐れ、遂に婿閻樂をして、二世を望夷宮に弑せしめ、公子嬰を立てて、秦王となす。二世の兄の子なり。嬰、既に立つて、趙高を族殺す。

始め、楚の懷王、諸將と約す、先づ入つて關中を定むる者は、之に王たらむと。當時、秦兵强く、諸將、先づ關に入るを利とするなし。獨り、項羽、秦が項梁を殺せしを怨み、奮つて、沛公と共に先づ關に入らむことを願ふ。懷王の諸老將、皆曰く、項羽、人と爲り、慓悍猾賊。獨り、沛公は寬大の長者、遣すべしと。乃ち沛公を遣す。

高陽の人酈食其。沛公麾下の騎士に謂つて曰く、吾聞く、沛公は

酈食其